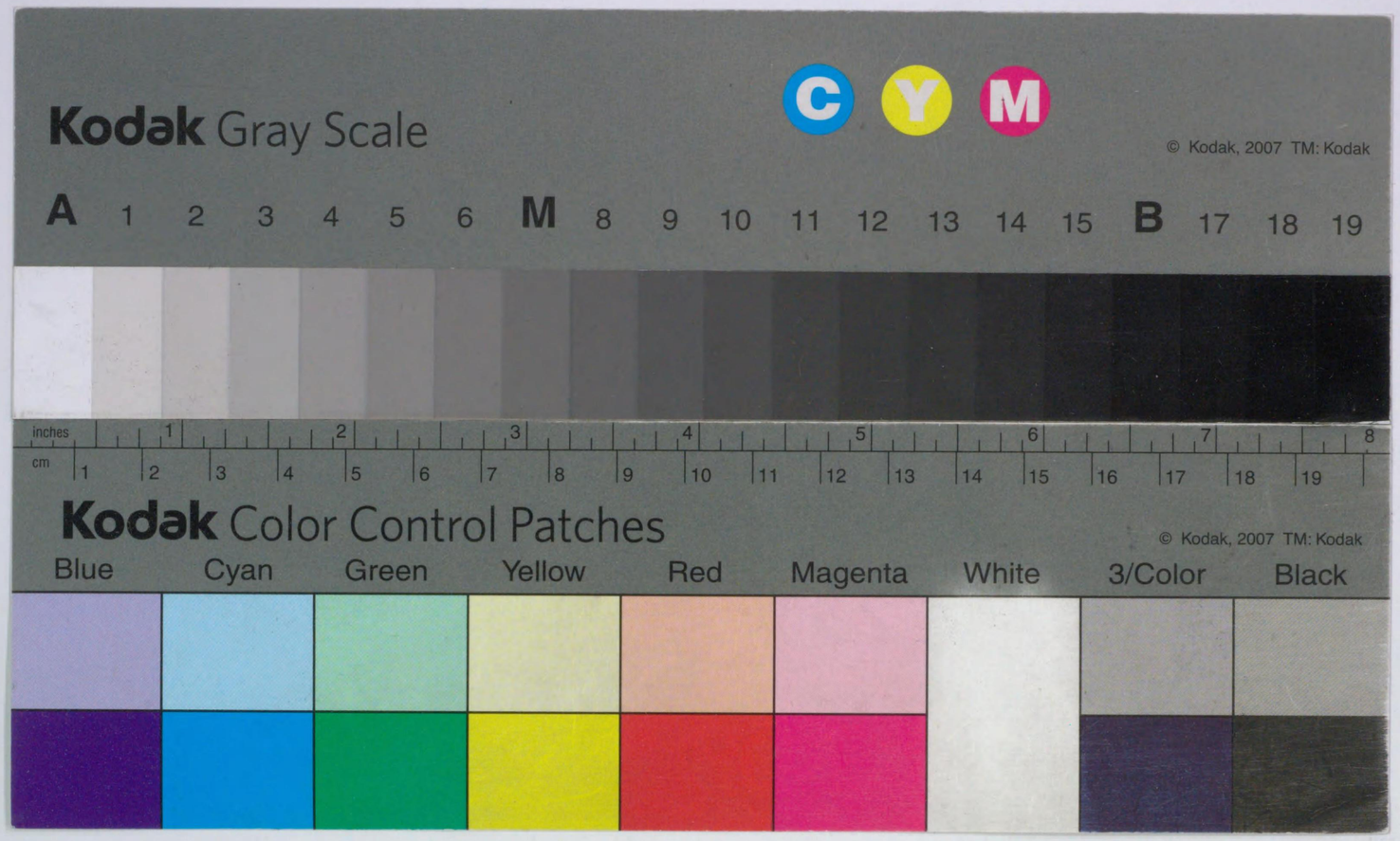


698-95
1200501581706

28.10.22

紀伊國名所圖會

中卷

昭和十二年寄贈

698
95

紀伊國名所圖會中卷目次

初編六卷上

那賀郡

那賀郡	一
野上川、盆石、亀の川、福王寺	一
愛宕山、月光山勢至院法然寺	一
法然寺、影向の松、九品寺の圖	二
別院、稜ヶ峯之圖	二
如來山蓮臺院九品寺、稜ヶ峰	五
野上山別院金剛遍寺	五
孟子不動之圖	六
孟子山不動院那賀寺	八
國主神社	九
國主神社、國主院、諸井堰之圖	一〇
深淵	一三
國主大明神祭禮之圖	一四
瀧王山國主院藥師寺	一八
神戸、古社、権大明神祠	一九
伽藍山遍照院惣樂寺	一九
大多羅乳女神社、高幡山法華寺	一九
権大明神祠、惣樂寺、礫石ノ圖	二〇
王子ヶ峯、一乘山妙音院観音寺	二一
白岩谷	二一
大多羅知女神社、王子ヶ峯、法華寺の圖	二二
たゝみ岩、ゑほし岩、ふうふ石の圖	二四
蓮華八幡宮	二七
蓮華八幡宮之圖	二八
亀淵池、丹生神社、西山谷川	二九
太刀洗の井、大乘山蔵王寺	二九

箱山、經ヶ淵、石手 三〇
長山村太刀洗の井之圖 三一
刀 編六卷下 那賀郡 三二
九頭神社、御池法界院藥師寺 三三
御木森神社 三三
藏王寺石手里之圖 三四
宮堰水祭之圖 三六
藏王権現社 三七
藏王権現、大橋神社、御木森の圖 三八
九頭神社、藥師堂之圖 四〇
大橋神社、懷岳山正清院光恩寺 四二
光恩寺、吐前王子之圖 四三
藏王権現社、明良山觀音堂、秤石の圖 四四
藏王権現社、月良山觀音堂、秤石 四七
津田監物等長等種島ヨリ鐵砲ヲ得ル圖 四八
宮堰水 三二
那賀郡
吐前王子社 五〇
砲術家津田監物等長宅 五〇
田村麻呂之圖 五二
日延島藏王権現之圖 五四
山王神社、榮福寺之圖 五四
日延島藏王権現社 五五
山王神社、田村將軍冢、山王神社 五六
金剛山壽明院、宋福寺 五六
大市姬神社 五七
後高法皇五智房の御ヶ墓は谷ふ圖 五八
佐自神社、橘生神社、五智房の墓 六〇
流田神社、正福寺、大市姬神社之圖 六三
多門山正福寺、八王子社 六四
旗井、荒田神社 六五
御舩神社 六七
西坂本之圖 六八
住持池大蛇之圖 七一
住持池 七二
根來山、一乘山根來寺大傳法院 七三
東坂本村、岱大権現、菩提ヶ山之圖 七八
女人堂不動、信貴石之圖 七八
愛宕権現、地藏堂之圖 七八
三編一卷 那賀郡
岩手大宮之圖 二〇
岩手大宮 二二
岩手大宮祭之圖 二四
六角堰、天龍寶珠院、閼伽井寺 二六
大傳法院、鐘贊不動、大塔之圖 八〇
光明會道場、圓明寺、御影堂の圖 八〇
其三 八二
其四 八四
木像より血流て兇賊抵抗する者なし圖 八八
雪玉集 九三
什物品 九七
根來山往古伽藍之圖 一〇一
天正十三年兵火之圖 一〇四
櫻樹碑陰 一〇九
那賀郡
審教、觀音院、總堂寺、岩手里 一一七
岩手驛、疱瘡神祠 一二八
古市辻、船津社 一二八
安樂寺、三乘山傳法院、大日寺 一一九

舟津社、大日寺、安樂寺、藥師寺圖 一二〇
蟹谷山宝幢院西方寺、孝子酈四郎 一二二
白山妙理大権現、東坂本村 一二三
白山権現、遍照寺、三部明神、金輪寺圖 一二四
根來椀、根來彫 一二六
土佛峠、鴛鴦川、意看翁墓 一二七
鴛鴦川之圖 一二八
白影須黨 一三〇
塔乃芝 一三一
國分寺之圖 一三二
塔乃芝の圖 一三三
日置毘登弟弓故居、春日川 一三四
八光山醫王院國分寺、袈裟坂 一三四
三塚、羊の宮 一三四
若宮八幡宮、倉谷川 一三五
恵福山觀音院常樂寺 一三五
妙見社、鞍懸松、山王権現 一三五
三會寺、若宮、羊宮、實報寺圖 一三六
三墳 一三七
若宮八幡宮、田中井戸 一三九
關白師道公之圖 一四〇
田中の井戸之圖 一四二
山吹森、一の宮、明算阿闍梨誕生地 一四四
良禪阿闍梨誕生地 一四六
植槻森、邊土村 一四六
邊土山地藏院極樂寺、安國寺 一四七
龍門山之圖 一四八
春日山、春日社、東三谷之圖 一五〇
中三谷、西三谷之圖 一五〇
大磯虎車塚、和田城墟、春日社 一五二

春日山城墟 一五三
建初山愛染院金剛寺 一五四
俵藤太秀郷碑、藤原泰成故居 一五四
金剛山、福琳寺 一五六
福琳寺之圖 一五七
海神社之圖 一五九
海神社 一六〇
海神池、三熊山陽瀧院権現寺 一六一
南陽山十輪院傳法寺 一六二
摩尼山寶珠院延命寺 一六二
薦阪峠、櫻池、産土神社 一六三
小竹行宮舊跡 一六四
住吉社、さくら池之圖 一六五
小竹行宮ゟ神功皇后之圖 一六六
笈おろし 一六八
東屋峯、笠松、千草ヶ山獄 一六九
大木越、如意蓮華院觀音寺 一六九
藤の井戸、猿引、風森大明神社 一七一
長田觀音之圖 一七二
風森社の圖 一七四
風市森 一七五
恩賀故居 一七六
奉玉山西方院中山寺 一七七
大伴船主故居、伴益継故居 一七七
十口一尾銘 一七八
八幡宮、氣鎮神社、廢誓度寺 一七九
藤井、中津河前鬼末裔、産土神社 一八〇
阿彌陀堂 一八一
中津河之圖 一八二
秤木宿、大人足跡、五本松越 一八四

粉河町 一八五
粉河寺 一八七
粉河寺之圖 一八八
其二 一九〇
童男行者大伴孔子古が宅に宿とる圖 二〇〇
大伴孔子古千手觀音を拜する圖 二〇二
河内國佐太夫參詣の條之圖 二〇三
粉河寺に藏する緣起の圖 二〇五
坊舍二十二箇 二〇六
例祭 二〇八
緣起一卷 二一一
南町より出る車樂之圖 二一六
粉河祭禮の圖 二一八
其二 二二〇
其三 二二三
粉河車樂の圖 二二四
所靈地 二二六
粉河寺八景、風猛山 二三七
粉川 二三八
古戰場、猿岡山 二三一
天照皇大神宮、鎭垣船 二三一
鎭垣行宮趾、御所芝 二三一
祇王舞田 二三二
玉垣句頓宮、高野辻、陽山 二三三
妓王の舞田の故事 二三四
黒箱に名を記す所の圖 二三六
若一王子社 二三八
黒箱 二三九
富士崎 二四〇
藤山寄之圖 二四三

名手川、鎭西滿隆城址、本山大神宮 二四四
光明院、至一上人誕生地、粉夢寺 二四五
馬宿村、宇野若狹守城址 二四五

三編 二卷

野上小畑八幡宮之圖 二四八
野上八幡宮 二五〇
箕子橋、小川鄕、八幡宮 二五二
箕子橋之圖 二五三
井口村、帆立松、平野村、兒松圖 二五四
下津野村、逗留宮、椋木、藥師寺圖 二五四
笠石生石峰、伊勢街道、逗留宮 二五六
應神山明王寺、極樂寺 二五七
星河井生高野西大明神社生面 二五八
星川之圖 二六〇
大歲社、天王山大日寺 二六〇

那賀郡

調月氏裔、妙法壇 二六〇
荒川鄕、荒川戶辨故居 二六一
塩谷伊勢守墓、市場村 二六三
美福門院 二六三
調月、大年社、上野之圖 二六六
御舩明神社 二六九
御舩社祭之圖 二七〇
友淵越、秘文瀧 二七三
安樂山遍照院興山寺 二七四
最初ヶ峰城跡 二七四
龍門山 二七五

古城墟 二七六
龍門山合戰之圖 二七八
善通寺、茶臼山 二八三
桂谷之圖 二八四
楠正成飯盛山の砦を攻る圖 二八六
鎌倉谷、桂谷 二八七
三編二卷 二九六
伊都郡畿內南限妹妹山 二九八
妹背山之圖 三〇二
妹川 三〇四
妹山雛子長者館之圖 三〇六
關白賴通公遊覽の圖 三〇九
舟岡山 三一〇
萩原古驛、寶來山大明神社 三一一
嘉世田神社之圖 三一二
飯盛山 二八八
赤生津渡の圖 二九〇
赤生津岸下の圖 二九二
赤生津鄉九頭社、赤生津渡口 二九四
赤生津岸下 二九四
志賀谷鄉 二九四
伊都郡 三〇〇
文覺上加勢田庄にて堰を造るの給圖 三一三
文覺堰、仙人翁是吉墓 三一六
産物紅花、大宮社大日神社 三一七
十六勢力塚 三一七
四鄉谷、槙尾道之圖 三一八
眠尾、藏王嶽、槙尾道、燈明嶽 三二〇
定福寺、文藏瀧、瀨除觀音堂 三二二
佐夜久の宮、草田山古城趾 三二二
月壽房圓雅大神宮權理鄉 三二二
産物川上酒椿の森、鏡宿 三二二
八國がそぶ天女山地藏院春寺 三二三
車瀨、西福寺、地藏寺 三二三
川上毛めん織工の圖 三二四
道の王石、御所芝 三二七
住吉大明神社、瀧の井戶、小田神社 三二八
行合坂、觀音寺 三二八
小田神社之圖 三二九
狹屋寺にて上田三郎廢帥と罵る圖 三三〇
栗原狹屋寺舊跡 三三一
瑠璃山金剛院醫王寺、證誠權現社 三三二
大畑、竹尾之圖 三三三
三重塔墟 三三四
姥瀧、錢坂城墟 三三六
證誠權現の神寶を兵士等分ち取の圖 三三八
市御借屋旧趾、總社三部明神社 三四〇
總持山轉法輪院醫王寺 三四一
坂上基澄墳 三四二
坂上清澄 三四二
坂上基澄墳之圖 三四三
大我野、丹生山藥師院妙樂寺 三四四
東家往來之圖 三四六
相賀驛、東家村、東家渡口 三四八
橋本、東家、陵山之圖 三五〇
松の橋、橋本町 三五二
川上船 三五四
應其寺、土屋氏裔、陵山 三五五
相賀八幡宮 三五八
牲川氏宅趾 三五九

胡麻生八幡之圖 三六〇
菖蒲谷、出塔、山田、吉原の圖 三六二
易産山護國院地藏寺 三六四
紀伊見峠、長藪城跡 三六五
阿闍梨維範入定の圖 三六六
紀伊見峠之圖 三六八
阿闍梨維範 三七〇
調御房定嚴 三七一
隅田一族 三七二
葛原氏末裔 三七三
不動山、寶雲山小峰寺 三七四
霜草烟草 三七五
闇饅頭屋之圖 三七六
妻の森、西光寺、名物闇饅頭 三七八
利生護國寺 三七九
護國寺之圖 三八一
隅田八幡宮之圖 三八三
高尾城跡 三八四
平野城跡、霜山城跡、高橋 三八五
隅田八幡宮 三八五
古鏡之圖 三八八
粉河田 三九〇
隅田川 三九一
粉川田の由來圖 三九三
神野倉谷之圖 三九四
庵崎、待乳山 三九六
真土山之圖 三九八
堺川、落合不動、六人部氏 四〇〇
紀和兩國古堺 四〇一

三編三卷

伊都郡

滿願寺瀧、四村郷星河村、御所 四〇五
澁田村蟻通社之圖 四〇七
雅真僧都墓、蟻通明神社 四〇八
志富田氏 四〇九
皮張明神社之圖 四一〇
皮張明神社 四一二
旌掛松、鎌八幡 四一三
酒殿明神社 四一七
久江、九度山之圖 四一八
九度山地藏堂、真田の舊跡之圖 四二〇
慈尊院、槙尾山、明神社、善名稱院 四二二
真田抜穴、學文路村、丁田村 四二三
清水村、三軒茶屋 四二三
岐阜中納言秀信卿墓 四二三
上田三郎文忌寺、上田播磨守墓、糸の細道 四二三
谷奥深村、志賀谷筋、志賀野郷 四二四
畠山高政末裔、龍光山殿圓王院金剛寺 四二五
釜瀧藥師之圖 四二七
真國祭禮之圖 四二八
丹生七社明神社、真國郷 四三〇
丹生高野兩大明神社、天狗岩、細野郷 四三〇
勝谷峠、大宮、友淵郷、妹脊莊司末裔 四三〇
小原淵、友淵八幡宮 四三一
友淵八幡社の古畫之圖 四三二
友淵、細野、真國之圖 四三四
志賀郷、下司彦六祠、丹生高野明神 四三八
大橋、梨木峠 四三八
花坂、長谷谷筋、神野郷 四三九

河野城蹟、十三社明神社、藏王權現社 四三九
神野市場、猿川之圖 四四〇
滿福寺 四四二
金剛寺、猿川鄉、熊野十二社權現 四四三
毛原鄉爲帽子岩、 四四四
朝日寺、丹生高野兩大明神社 四四五
立石、祝詞石、長谷鄉 四四五
毛原、長谷、花坂之圖 四四六
榊山、産土神社、北又鄉 四四八
若子岩、黒河峠、摩尼鄉 四四九

三篇四卷上 高野山

其二 四六二
其三 四六四
其四 四六六
其五 四六八

其六 四七八
其七 四八〇
其八 四八二
其九 四八四
其十 四八六
其十一 四八九
其十二 四九〇
其十三 四九二
其十四 四九五
其十五 四九七
谷上總圖 四九八
其二 五〇〇
奥千手院谷五之室谷、二心院谷總圖 五〇一
千手院谷つづき 五〇二
高野山金剛峯寺 五一〇

杖藪、傳供木的場山、陣ヶ峰、櫻峠、宿、温泉 四四五
筒香鄉、雨乞峰、七霞峰 四四五
藤白峰、明神岩、富貴鄉 四四五
名迫明神祠、湯川鄉、天狗嶽 四四五
花園鄉 四四五
在田川の水源之圖 四四五
佐久間信盛幽居之圖 四四五
大瀧村、大瀧、佐久間信盛故居 四四五
簗瀬皮、新村 四四五

高野山 四七一
其二 四七二
其三 四七五
其四 四七五
其五 四七六

領地 五一二
臨幸、親王家御登山 五一三
法皇高野山詣 五一四
大臣家御登山、將軍家御登山 五一六
登山七路、大門口、不動坂口 五一七
大瀧口、龍神口 五一七
七十二人持の大石塔を高野山へ荷い登る圖 五一九
大峰口、黒河口、相浦口、雜事登 五二〇。
大門口、慈尊院村、下乘標石 五二三
町率塔婆供養碑、下乘橋 五二二
慈尊院 五二三
高野山林風慈尊院之圖 五二四
官省符參之圖 五二七
町率都婆 五二八
七社明神 五二九

中橋氏　五三〇
四所庄官、勝利寺　五三一
勝利寺之圖　五三二
榧蒔石、雨壺山（追分八町坂）　五三四
天野、天野神社　五三四
天野社、舞樂之圖　五三八
天野社神事能之圖　五四一

三編四巻下　高野山

團三郎碑、有王丸墓、子日権現社　五五五
亀田大隅守碑、小都知峰、二川鳥居　五五五
古佐布村、梵字岩、應其池　五五六
地蔵堂、笠木坂、日光月光窟　五五六
矢立茶屋、鑁字池　五五七
地蔵堂、赤坂、袈裟掛石　五五八
捻石、涙川、押上石　五五八
天野社新嘗祭之圖　五四二
總神主　五四五
傍の宿、西行堂　五四九
（丹生明神不動明王の威靈に因て蒙古の賊兵鏖滅之圖）　五五〇
西行堂之圖　五五二
押上石之圖　五五九
鏡石之圖　五六〇
七色木、鏡石　五六二
猿渡、鳴子川、關屋　五六三
大門口、関屋合戰之圖　五六四
〃護摩壇　五六六
見越坂、化粧坂、雲柳、笑松　五六七

下乗牌、女人堂　五六八
大門　五六九
大門より天野までの圖　五七〇
天野社之圖　五八四
天野つゞき圖　五八六
不動坂口、清水川、二軒　五八八
三軒茶屋、地蔵堂　五八八
衣懸櫻之圖　五九一
丁田天神、清水町之圖　五九二
鑁不動、生地氏裔、丁田天神社　五九四
學文路、物狂石、慈尊院道　五九五
梅天神、苅萱堂　五九五
玉屋之圖　五九六
石動磨登山之圖　五九八
大師硯水、河根村　六〇二
産土神兩社、産物傘紙、河根川　六〇三
千石橋、作水、櫻茶屋　六〇三
神谷辻、卒都婆木、四寸岩　六〇四
不動橋　六〇五
四寸岩之圖　六〇六
不動坂口、女人堂之圖　六〇九
萬丈轉、外の不動、岩不動　六一〇
兒瀧、花折、女人堂　六一一
不動堂　六一三
山人部屋、一心院谷　六一四
不動坂より學文路までの圖　六一五
其二　花折、兒瀧　六一六
其三　外の不動、万丈轉、不動橋　六一八
其四　四寸岩、卒都婆木　六二〇
其五　櫻茶屋、神谷辻　六二二

其六 河根村、千石橋、塩竈、蹉跎、日輪寺 六二四
其七 大師硯水、苅萱堂 六二六
其八 學文路、西光寺、物狂石 六二八

三編五卷

大門之圖 六三二
大門 六三四
地名内外八葉峰 六三五
禁止 六三六
畜狗 六三八
山上十樂 六三九
弘法大師初て高野山に登山之圖 六四〇
時候 六四二
土室にて寒氣を凌ぐ圖 六四七
小田原谷往來之圖 六四九
氷豆腐を製する圖 六五〇
高野山
西院谷坊舍七十六箇院 六五二
秡川辨賊天社 六五二
來迎堂 六五三
大湯屋 六五四
辨賊天祠、愛宕大権現社 六五五
壇場 六五五
後嵯峨上皇御幸之圖 六五六
中門 六五八
金堂 六五九
大塔 六六〇
灌頂堂 六六一

御影堂 六六二
壇場總圖 六六三
其二 六六四
其三 六六六
三鈷松 六七三
壇場御影供之圖 六七四
鐘樓 六七八
毎年大晦日壇場法會之圖 六八一
準胝堂、孔雀堂、新御塔、西塔 六八二
丹生大明神 六八三
鐘樓、閼伽井、龍臥洞 六八六
六角堂、七種靈木 六八六
飯鍬の芝、愛染堂 六八七
盥漱盤、大會堂 六八七
三昧堂、西行櫻舊跡、東塔、蓮池 六八八
南谷、勸學院 六八八
鐘樓、寶庫、勅使門、築地、庵室 六八九
杉子の芝之圖 六九一
花王院本尊の因縁之圖 六九二
遍照峯 六九三
虎が峯、地藏堂 六九四
丹生明神出現之圖 六九七
豊臣大閤肖像 六九八
端溪硯の圖 七〇〇
寶性院、大師堂 七〇一
南谷の内西光院谷 七〇三
谷上坊舍六十箇院 七〇四
穀屋 七〇五
一の瀧不動尊 七〇六
正智院快雅法印傘を堂中に立て法を修する圖 七〇七

大日堂、嶽辨財天社 七〇八
深覺大僧正之圖 七〇九
明算上人之圖 七一〇
本中院谷方舍十四箇院、瑜祇塔 七一三
蛇原、六時鐘樓 七一四
且過堂 七一六
荒神祠 七一八
興山寺之圖 七二〇
巡寺八幡神幸之圖 七二一
一心院谷、金輪塔 七二三
不動堂、心字池、五之室谷 七二五
大德院御宮大師堂、極樂堂、除尼大師 七二七
三編六卷 七三五
小田原、青巖寺 七三七
青巖寺之圖 七三七
首途辨財天 七三三
大德院の圖 七三五
光臺院 七三七
千手院谷 七三九
二品親王覺法之圖 七三〇
千手觀音堂、萬日堂 七三一
青面金剛堂、熊野權現社 七三二
合躰不動堂 七三二
秘井 七三二
天滿宮 七三三
千手院橋 七三四
高野山 七三五
冷泉為世卿閑居の圖 七四一
佐々木高綱畫像 七四二
赤松圓心木像 七四二
貝母月之圖 七四三
蓮華谷六軒石珠數屋之圖 七四四
蓮華谷 七四六
廿日大師 七四七
阿字觀堂 七四八
文六堂、五大尊堂、千本槙 七四八〇
清淨心院谷之圖 七八一
齋藤瀧口入道之圖 七八二
荒五郎妻の慾心を歎て發心の圖 七八五
別所圓通寺之圖 七八六
別所圓通寺 七八八
奥院一の橋 七九一
鍛冶ヶ芝、東谷、摩尼街道 七九二
彌勒堂 七四四
圓山辨財天祠 七四五
小田原谷の奥湯屋の谷圖 七四六
唐青龍寺尾硯の圖 七四九
武田信玄青 七五二
武田信玄肖像 七五三
轆轤峠之圖 七五八
往生院谷 七五九
阿彌陀堂 七六〇
米元章荷葉硯之圖 七六二
大師堂 七六四
大師行狀記中俗典讚仰の條 七六六
備後守時通之圖 七六八
萱堂 七七〇
萱堂之圖

曾我兄弟碑二基、犬の墓 七九四
法明上人碑、天神坂、天神社 七九五
熊谷蓮生碑、平敦盛碑、玉川 七九五
玉川之圖 七九六
爪彫地藏、行基菩薩碑 七九七
佛供杉、愛宕権現社 七九七
數取地藏尊 七九七
塊亭碑、多田滿仲公碑 七九八
腰懸石、蛇柳、護摩石、世南碑 七九八
燔死群靈之碑 七九九
蛇柳之圖 八〇〇
立合藤、明智碑、江戸失火燔死碑 八〇一
門脇宰相舊蹟、護摩爐 八〇一
嚴島明神祠、慈尊院明神祠 八〇一
天野明神祠、中の橋 八〇一
棺懸櫻、流汗地藏 八〇一
藥井、住吉祠、熱田祠、八幡祠 八〇二
天照大神祠、春日大明神祠 八〇二
逢阪、吉野藏王権現祠 八〇二
辨慶力石、覺鑁堂、櫻來田圖 八〇二
大師の供物を奥院に運ぶ圖 八〇四
朝鮮役士亡靈の碑圖 八〇六
頰截地藏尊、二番石塔 八〇七
足刑地藏尊、朝鮮役士之碑 八〇七
天の川、辨財天祠、熊野権現祠 八〇九
閑院宮御寶塔、一番石塔、芭蕉墓 八〇九
石清水、清水觀音、雙輪塔 八一〇
繼信忠信碑、漆犬碑、盥漱盤 八一〇
俵藤太碑、聲明地藏尊 八一〇
六孫王經基碑、淺野内匠頭碑 八一一

織田信長公碑、大閤秀吉公碑 八一一
本阿彌七基石塔、木食所 八一一
姑射山、御供所、 八一二
護摩堂、御室御庵室 八一三
靜蓮法師庵室跡、求聞持堂 八一四
斷食所、參籠所 八一四
水手向所、明遍杉 八一五
御廟橋 八一六
燈籠堂内の圖 八一九
彌勒石、靈元帝御寶塔 八二〇
中御門帝御寶塔、櫻町帝御寶塔 八二〇
桃園帝御寶塔、閑院宮御宝塔 八二〇
笠地藏尊、盲大師、親鸞上人碑 八二〇
燈籠堂 八二〇
持經上人碑、御所芝 八二二
應其上人五輪塔、覺智碑、骨堂 八二三
奥院御影供之圖 八二四
阿伽井、看經所 八二七
一切經藏、丹生高野兩大明神 八二八
靈鳥、佛法僧鳥 八二八
燈籠堂之圖 八二九
萬年草、三山、御廟 八三〇
弘法大師號を賜ふ圖 八三〇

那賀郡

野上川

山原は高野山大門の谷より出て志賀村・毛原村・野田原村・小川村より野上荘を経て紀の川に落る

盆石

野上川の水の谷より出る、この石は形さまざまにして白色なり、白雲のごとく、おもしろし

亀の川

この川中に梅干岩といふあり

福王寺

本尊如意輪観世音　弘法大師作　長二尺八寸　不動明王

愛宕山 大蔵寺

本尊薬師仏 立像にて

月光山 勢至院 法然寺

宗祖円光大師の像

本尊阿弥陀仏

聖衆影向の松

三尺五寸

東安山 年中 珠勝の古寺

法然寺
景向の松
九品寺
別院
後ヶ峯
浄土本朝高
祖傳曰大師
爲得大勢至
應化其證非
南記
雲城
三州
京夢
九品寺

一端靈山之別
修現無邊光
身亦勝法會師
之肖像讃賛爲
書勢至圓通之偈
復竄居讃州生
福寺親手刻勢
至之像藏一偈
有法然本地
身大勢至
菩薩之句
又熊野大
權現示門
人直聖
曰師勢
至之化身
也等詳出
于傳
和向の
雲川
加賀
希因

署に清月老松をてしたく崇地の落ち春寂たりかけたく
文治三年未春三月浄土の元祖法然上人御歳五十五歳
のとき然野三所権現へ参籠ありけるとき此所にきえん
おしせらきまゐらく錫ばとぶるひしわれ同郷松水村に一人の
猟師あり豆い亀の川にて鱗を漁し後い山に入て諸獣を
狩く世ば流るゝ女房このことを深く歎きてとゞめたれども
こまば用ひざりければ其後に御僧の来りたまへ今はきこく
上人はむかひ身の罪業ふかきを懺悔し未来をたすけん
ことを願ふ上人いとゞ哀れにおぼしめし先智閣紙五障三従
の女人までも一度弥陀の本願に帰入し名號をおこたらば
悔をば仏の光明の中に掛れして極楽の飛陵も忽消滅し
西方浄土にいたらんと仰の鋒があるべきと動る法の恐ろく
同音に念仏しまゐへば其ゝ合掌して終りぬ夫もさらきを

懺悔し亀の川へ身を沈めて空しくなりぬ今に古松二本
塚のまゝしにありとぞ支ありして當寺ば再建し二季
春秋時に此の日は今に日想観修練の念仏怠慢なし実に
大師舊蹟の一員なり

如来山蓮臺院九品寺 九品寺村にあり浄土宗蓮西派法然ゆるに屬にたゝへ
仏刹岩きさり年久しく廃せり今奉を一字のこれ
しく 堪石あるべ田圃の中にあり
別院村西の峯にあり
古蹟二樹あり 其意載しとなり

祝が峯

野上山別院金剛遍寺 同村にあり 古義 宗 御寺 本尊千手観世音 弘法大師作
長二尺二寸
弘法大師作

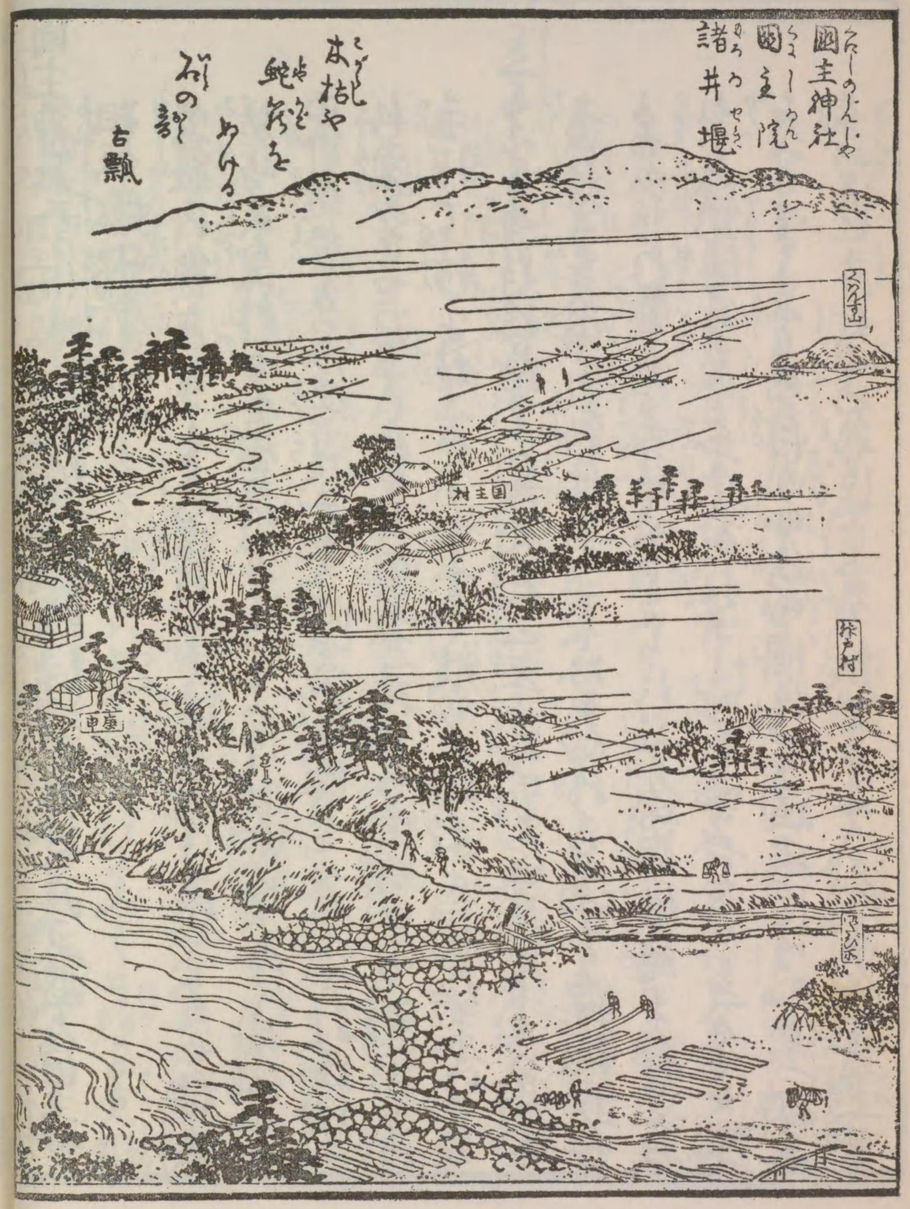
脇士 地国天 金門天 ともに 法門作 大師堂 弘法大師作 寺 像作 志しに 西国にて 四国八十八ヶ
所を 後て 弘法の 第四十七番に 此に 法師 寺に
一番に 新ひのつとの 末なかく 後世かけて 程をこの 又 西国三十三所 観音めぐり 第八番の 松尾
此山寺は古刹なりしを天正の兵燹の後いつゝの丈室維摩が
居に比しく十分ばかりなる雲を帯て浄金を
めぐりしの月に和しく僧厨に入寂莫たる鐘磬の音
巻埃ば避て三乗を法しめた野山の日かげ長閑にして

孟子不動
清暑瀑
飛瀑落山巔。
巖巖摧爲雪。
忽被天風飄。
掃却人間熱。
山根清

尾張 丈草

十住心の花の匂ひおぼすまゝ弘仁年中弘法大師四海を
めぐりしかるに此地湍雲漠々として立昇るこれ靈城也
とて梵閣を造立し號く野上ちといふとなりけり當社
生土神八幡宮の御本地仏かしく別院の名あり本尊大
悲觀音地獄道の三障を除ぎるむしも今も靈驗新し
是子山不動院那かなる 是子村西十三四町山の中にあり 古義洛東勅修寺末 本尊石像ふ動の王
仏法大師の作 長三尺四寸 當山は弘仁年中新空海諸国遍經のとき
此瀧のもとに來りなまひ國家平安の御願一七日結行し
なまふに不思議や宮上にふ動尊ありまたまふ其尊容を
寫させられ作るに威相凜々として殊勝の尊像にして
大盤石上に立せる此尊は巖上に遠く其めぐりは崔嵬
たる巖石屋々として飛泉は翠岩にはしらせ落る蒼樹
蓊蓊として陰涼ふ激し毛骨悚然として近づきがし

國主神社 国主村にあり貴志庄十四ヶ村の生土神 祀神三座正殿大国主命
相殿 左 天照皇大神 右 少彦名命
當社御鎮座はいとも久遠にして其始はなびらかにせれ中興
嵯峨天皇神告を感得なしたまふ御勅願によつて弘仁九年
の御造営なり其後天皇遥に鸞輿をめぐらさし當社に
行幸ありしなまひ常磐堅磐は此宮の堂の末の榮とて清
手ぼうに格を植させるに今社ぶに神木と称するもの是
まて其後復和と夏天七三年天下大に旱せしかば是に
當社に幸幣の勅使をくだしたまひ御雨のぶり給ひけ
るにしに無意大祓とらまちに社の深淵渇まれたら
就神水とはうらに玉雲を起し雨を喚ぶぞとこへるが沛
然しく音雨降り四海の洞渇を蘇へしめたまふ程に
はしらしく代々の御建堂殿他に異なり就中後宮上皇


國主神社
國主院
諸井堰
本社
国主村

松前 汶水
若挾 一和
近江 重厚
本社

然るに三山御幸のおりし風興を寄たまひし建久の比右幕下頼朝卿社頭再建の下知ありて同六年大江広元に奉行して造営ありと東鑑に出　其のちまた神領若干を寄附さるゝかくたつて久しくませし神垣の星霜をへし蒼海桑田のかはりてひとへに天正のころや織田家の令によりて神領は没収せられしかどさかりあり　富者も今は僅に神をひくく立所ざんにもありしとかや

深淵

同社の前より三月朔日より三日まで国主神社のおかれ神供を神ちの世俗へ捧く　大人数は半志の大餅を人々まゐる山まで鋪より十文字に二本の小山は相連れ其つゞき継たりしより此所の加里まで松杉などを茂らし身の毛もいよだつ川の其まゝ巌石あり　そこ淵上にて川と云へくらんや林代の始めよりまゐりしかばんしけんかの往よししろれおそんや

烏帽子岩　鞍掛岩　諸井堰

仮面　深淵の下なる所に井堰を築きて里の田へ水を引くなりけれ淵より出たる林をしたしみ年中の大旱の年にも涸るゝことなし　かのまはりは燃しるれ面を祈りそその四組をとむすへ淵十七氏の家あり　もとは此所の奥なる人知るの事をしるやなくしんは其上にもとも人なくれは出ぬ長原より入ぬれば此辺中をゆくに尼寺村より来り入かる

大盤塊御引出しらなの主は忘れてつれありしく其子の手まぐりを忿りとり冊く半しら侍烏帽子大紋服の者のを着く式あり其上下を祓ひ酒を醸しる大き桶に石臼を真中にすゑて其の上にて丸く大きく延しく俵の如く備を細のしく仕ひ其のの如くう形はまるくしも三盆にかへらんとつる是この餅子の其所には霞へかけ神の左右へ其をけて上にすゑつるとつゝ上る餅の力うちたる人よりもすら有の棹めく竹にて其をまるく又は細とかきて左右へわたしてこれを八ひとつゝ下は車とうけ丸盤に二本ときしくせたく人足かつて百人もうらし大井を運ぶ御手桶二荷くらくの塩魚とたへこそが中にては雛子の足もあり　其は例のとうりと是又一つかへ飯をゆしより紙の袋にを紗燈かつくしつらにゆく女の賽とし其を頂きのせがるしく持運ひしとかへのあかんまでもうれ

洛要水

年比やめくれのこれはるひ初とそそれ志なしつゝ国主村よりの
野上川の辺に出れば神戸村より奉る塩物に重ねてこれも国
さるふ志をそなり支ともに音やしるひすとく道の色の志を
生に法いおとく酒れとかまと飯くふ其飯まゐてしく志を而風
のとく豆の粉をこそやらん六七合もやおしん皆これ祭の
主よりをくるとくかたみにいまて配者もそひたりをく尼ち村を
さぐ寝ふの勢を備ふる家あり立寄てうまいれ朝に志めし
をへさゝやうなる社会をたら臺所のことはは道を家ならべ
飯をうつしひろげ男女十四の人おましまゐをうさひ国府
もしくおつてあり板子もそうたさがすありこれ彼人まともものやし
なひにするまうくと云かたりなる家に入くれうのことは及
ひしうふとへは詫りなくく先光志尼十四村の客戸の旧を町
だうりもはくるなどのなりあるものの老人ゆ一村にまた人ゆ

年毎に三人此なのめしとしてまゐ川年より一とせが間りしく
ものあし田はくるつさともやめ人ゆも交りけれ月代祭なども
かはく刺どたゞ川くまゐのこつ人まゐる板岐なのおめ六百の
経は塩物よりまゐりつゝ人五六十人ばかり日とふ入込ものしひ
酒ようべおでは其法物はよりの国子なり密林の大きの如を
串ふさは其数一万三千本白米十二俵なりまゐ米はどふ客
彼支どもふ月四ゆる米十二俵きのふ人ゆ酒三石ばかりを費はは
さるふ又道のなどをたゞあるひは又彼支どものこゝろふく其
日はかしこまいてしばして道の中宮なとゞ四二三日が程も
いとゆいるとゆりさるをりはかさのごとく其中しなひを持はべく
此也へまとへく七十俵ばかりの米志らけ多くはゆるものとぞ
さしは四七廿八石大なる費といふべしかくしはまゐしは老の
力ばかりへべきまあらばさまば其親族も力を戮をくいふ柳

此等は世俗にいひつたへて昔此村のまへなる淵に大蛇ありて人民
おほく命を取られしかば村人おそれてまつりて牛
馬を以て人身を備へけると後に大猪の代に備へ
しかるに世間に云伝へつゝ今猶此
寺に飛驒国にて猿を神とあがめて生贄を備へしとある
たぐひなるべし其猿を生捕ありしとも焼捨しとやらね
よし記やら此大蛇の事も昔の物語にして人も知らず
なりぬ家の伝るもまたしらず古へよりの川の淵
がいくたびかなるゆゑにして

衛王山國主院薬師寺

同所にあり 浄土宗 本尊薬師仏 [illegible]

持佛堂 本尊十一面観世音

[illegible]

神戸

百姓本記 [illegible] 上[illegible] 永代 [illegible] 其頃 [illegible]

[illegible] 之件

国主 神社より [illegible] 神戸 [illegible] 大社 [illegible] 神戸の [illegible] 村庄 [illegible] 乃古 [illegible] あり

[illegible] 神戸 [illegible] 中古 [illegible] 国 [illegible]

[illegible] 押領 [illegible] 其地 [illegible]

崇神天皇七年八月七日大社国社と定 神地神戸と定 [illegible]

古社

同村にあり [illegible] 神社 [illegible] 磯石 同村東一町田の中にあり [illegible]

権太乃神祠

同村西一町余にあり [illegible] 九月七日 [illegible] 鍾子塚 同村西の方五丁斗にあり

伽藍山遍照院惣楽寺

[illegible] 本尊大日如来 [illegible] 座像 弘法大師の作 七寸八寸 [illegible]

鎮守社

牛頭天王 稲荷社 [illegible]

當寺は弘仁年中弘法大師の開創なりしを [illegible] 元年の兵火にかゝり [illegible]
佛閣 [illegible] 創立 [illegible]

大多羅乳女神社

北山村にあり [illegible] 九月廿日 [illegible] 大歳の [illegible]

高幡山法華寺

北山村にあり 日蓮宗 [illegible]

[illegible] 建立 [illegible]

王子が峯
日村山十丁にあり山脈より半腹より峰まの大門院観音寺
まで四丁六十六間 古剏にて年月詳ならず 開山
は厳中古仙 永仁年間の建立なり 山号の
なそる千手観世音 立像 長一尺五寸 作
脇士 惣長中古仏 作 託者
の扁額を證とすれども
其時代を詳にせず
像も何人の
らどうとう人 皇十四代
像七体 内
陰白美福門院真性 十一月二十三日
しづこころなのそよかぜ
おぐるみのくもり
白山若谷 日村山七八丁山の谷にあり
本朝国語云
紀伊国白山若谷という所い紀の川の南岸手里の未申のくま

大なる石粉金のあり皆赤く血の色のごとし生古は色潔白
にありたるを當所は古蜘蛛あるべく人を取周てとれの帝
より勅をくだしたまひしく是は退治するが其血すなはち
白岩を穢し今は其色変ぜれ血色なりしかるに一ども
生古の白岩谷をところの名にしたるは此谷の東なる峯
に叢あり其處は方五六段なる岩穴ありぬるさしあるを
或ひ云ふ此谷は山賊埋伏して鬼魅妖怪と企なし人を
威しく物を奪城に彌して古蜘蛛といふ此所有のこと
うち此れに貴志郡の里村野上の岩々を雕屋の景色
いふたりなしたるべく詠まれ童山巻々としく波濤のこと
粉十の白岩あるひは一段又は三五段もうりあるが谷の頂より
ぬりしまぐれよく林泉のごとく其間は清るにおかまたり
かゝる風色他にあるべくとも見えれば古人ほんて蜘血石と

紀伊國貴志莊八幡宮領蓮華宮村別當職并油田事任
相傳神貴次郎法傳領掌不可有相違之狀如件

從四位上行左京權大夫多々羅朝臣　在判

明德二年十一月廿日

亀岡池

日村より小七町ばかり山の半腹にあり此池の中に小岩あり
そのうちに亀に似たり宍の高さ三尺ばかり
西山村にあり紀伊二座丹生神宮の御社奉受祢れ日元亀三年卯月廿三日
二品親王任助とあり云々仁和寺と號歳萬神室とあり
小源へ西山の奥より出て其ながれ四十餘町にして
丸栖村と續く貴志川に落合まへ紀の川にいる

丹生神社

西山谷川

長原村小西三町ばかり海川の端にあり主人を大同年中田村の軍
土蜘蛛を退治せられしとなり此井にて大方とあらしとなり

太刀洗の井

山崎村にあり

大笠山藏王寺

言宗

本尊藏王權現

[illegible]

此山はもとの然られ南方にあたる縁の地なれは鹿瀬の名に紀伊国の分境と
あれは霊照感歎勝ぬもへし一宇を建立して七月廿一日此地をいとなみ給ふに異香芳郁として
一夜のうちに奇瑞あらはれ霊照法師の手にあり抑くまた呼かけ給ひしける
なるに縁起達し彼の山の威盛のあまり紀在昌抄の如く此洞あるさと記して
今をもて一枝葉の其根枯れて彫刻せんとし一比五句紀として出くる日の
あり此の妙なる霊と尊者の名をいひて秋迦仏法大師の像をこしらへ一日一夜の
内に刻る方の記すみとてさかりの異像白川法皇宝治二年乃ちゐる
さらに山林寺の十ゐる風筆にそへし法楽ありて弘布就として浄衣一部法花一口
をなる人々はる天正十三年 豊臣秀吉公の命に依て根本ちとを微責ひる
盛織僧のくた比の里洞をさかりし僧徒逃去りて丈夫大門弥陀堂
栖まく地の柞のく灰燼となる仔細なり此僧の一心をもてかく今に残れり

箱山（えこやま）

乃ち寺住といふちんく位此し其像は僧のなかにて経ヶ淵へ法花経を
此より東五丁ばかりにありむかし上人天安の比ほひ
書写しもちめたまへ偈出名を此淵にしづめたまひしかはかくいへるなるへし

経が淵（きやうがふち）

同村の東にあり里人の云ふ上人の母公なりとぞ淀君ともいふ此村の瓶池に死を求めし
たまひしを弔ひ上人此花経を書写して此淵に沈めたまひしとよりかくいへりまた
一説に天平年中よりわるのさかひの此淵へ沈めしものといふなり二三町の間

石手（いして）

西岸蔵石城深淵の辺をいふ くれして流るく あかくなれる黒色なり
今岩出と云ふは西国巡礼の街道にして紀の川をわたしありて此より茶店
めいふつあるうちまさ此ところの裡乗をはかなし頭の称をつけて岩出のしんといふ
名をえたしく味はひなりとぞ

岩手渡口

竹林行テ尽ス古渡接ス人家ニ潭影龍メ深翠山光帯ニ落

中州

霞觀魚停絃掉鼓睡立清沙更有超然遥朗吟興
特加

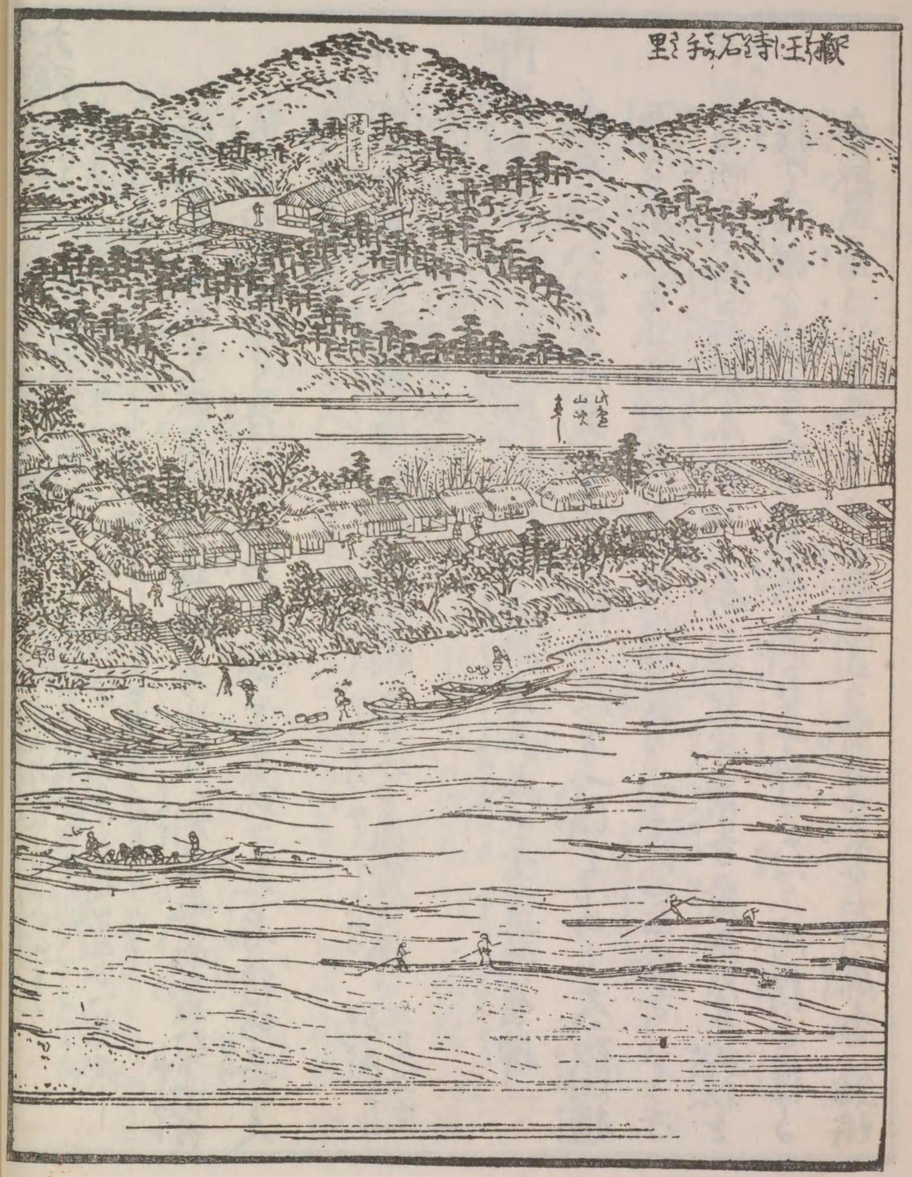
宮樞水 陽口同村の
れしまあり
相傳ふ住者神靈鮑とれしく年に含く草菜を薙除れ樞水
を疏鑿したまふといふ其年の尺なりとく川巾二丈一尺とお定
しなり毎年初まれ日前国魚両大神を後御なしとてまゐる
柳ハ日前宮の神輿のうち 祭ハ国魚宮の神輿のうち 名ふ御のこと給く小門をひらくの順御也
夫よりして紀の川水を樞へたりいかゆる旱魃れもこの樞水
涸るまゐし物ゆ天の田地を養ふの用漕なりとれは水亭四
年六月より此樞水の御論あり日前宮国造家とも佐荘の
地頭職とすぞれ多論れ於ける尖橋の法栗栖の法樞水の
中にあつく此樞水をいつらとる事先規なりてまゐよう城主
畠山の家臣松佑越前国継より出遊て水論ふ須をとなり

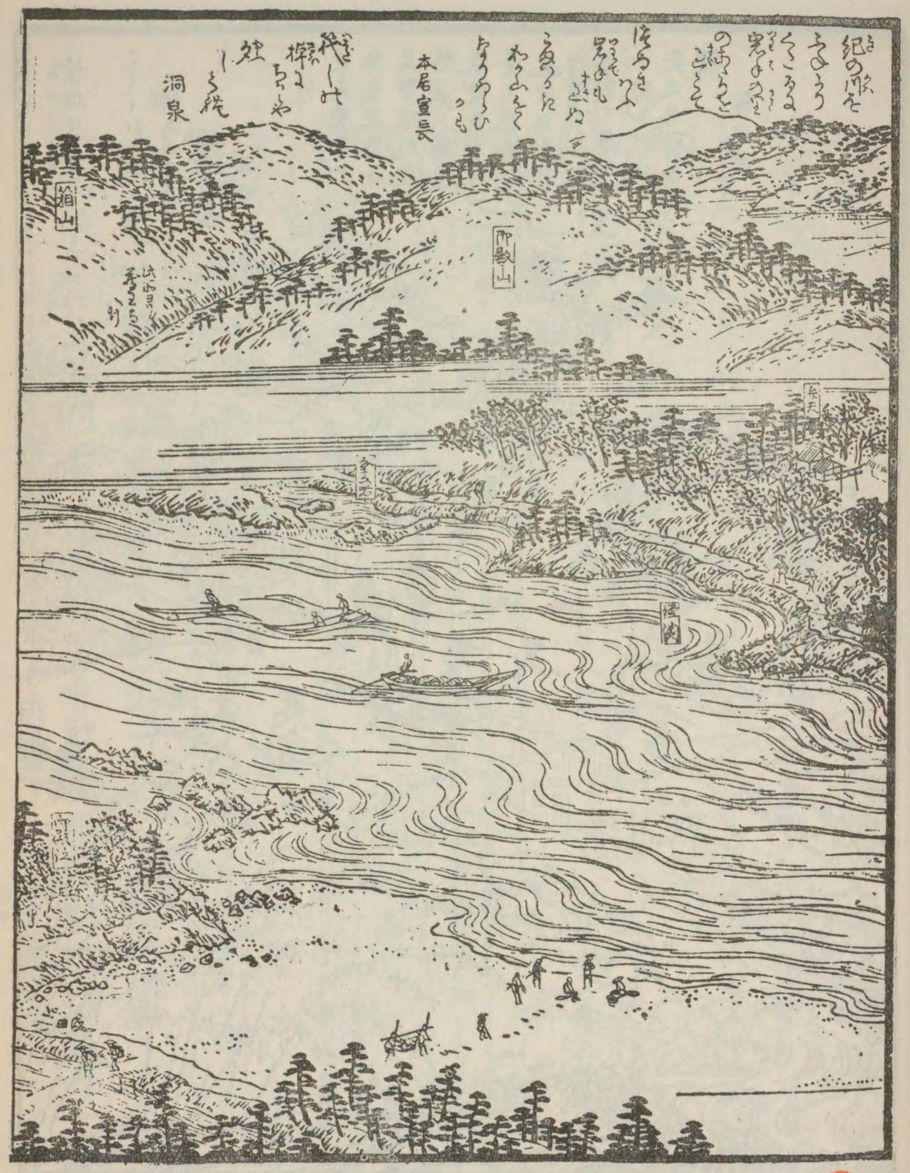
紀伊國名處圖繪巻之六上終

九頭神社 三毛村にあり相殿は安羽の神 三毛の陽山彼村の生去神にして 安武の神 白山彼村にあり 毎年九月午の日なり 天儀大自在天神 日天花 一葉の松 拓内にあり一葉にして枝葉四方へ繁茂し 素雨を避るのおりがけあり
當社ハ紀三毛麻呂の造建なりといふ則三毛麻呂ハ上宮
太子の臣にして守屋大臣を討たるのとき守護の兵一人
なりとぞ

御池山法界院藥師寺 同村にあり 古義院本 三州風來寺の開基 初修仙人 本尊藥子佛 二尺六寸

御本表神社 同村の西にあり 三毛も御本も倍同し 祀神太玉命手置帆負神
當社ハ神武天皇東征したまふ後ちじめて大和国橿
原に都志のふとれ帝宅を經営のふに天富命をして手
置帆負命彦狭知命此二命の孫を率齋斧齋鉏をして山材を
採て正殿を構立させのふ其商名草那に住ふ御材を採る
齋部の居る処を御本と云正殿作る齋部の居る玉を廉香 今安満





宮廻水祭

こしわひの
時をさし
よ世のうけ
　　志明

竹

渠先繁陰昔
孰者技竦千
尺碧琅玕。雲
梢漏月篩金
散。露葉含風
戛玉寒。嶰谷
截成鳴鳳管。
渭濱裁取釣
魚竿。王猷一
去無知己。徒
使此君臨曲
欄。

　　龍公美

[illegible]祭るよし古語拾遺にみえたり。此の地は天富命および手置帆負命・彦狭知命の子孫の住ゐける所にて其祖神を拝祭したまへるなるべし。[illegible]郡井辺村忌部里神社の祭神も同じ

蔵王権現社　[illegible]村南三町山の半腹にあり。[illegible]の生土神なり。九月十三日

[illegible]七八[illegible]小倉[illegible]蔵王権現[illegible]一日[illegible]川[illegible]其[illegible]法師[illegible]権現の神[illegible]三十二[illegible]山[illegible]小倉[illegible]

金鳥石　[illegible]の側

枝石　[illegible]境内山の入口にあり[illegible]小倉[illegible]

当社[illegible]神[illegible]社[illegible]霊[illegible]一歳の[illegible]鳥有となりしを[illegible]神影は民家の手に

藏王權現
大橋神社
御本殿
九頭神社
藥師堂

津山
東離
岩出
湖水

渡らせ玉ひしを寛永二年里老集會して再建れ當山の形
勝をしたれば前ハ紀の川の流れ清く後ハ翠巒山なく其ひえ
寺名恠石山顛にあらず幽鳥ハ林間に鳴り寂寞たる社頭なり
大橋神社 同郡大橋村 紀神 波止土聖神
懷岳山二清院光恩寺 小倉山 法西流 本尊阿弥陀佛
開山信誉上人の像 地藏堂 本堂の西にあり本尊子安地藏
鎮守祠 天忍皇太神 八幡大菩薩 共に本堂のちにあり 曼多羅堂 開山の廟
骨堂 後樓堂 林泉 風色幽雅にして 仙山ハ青石巨巖をひへ
の日の晩景あり 蓮池あり 月の花ざかり
まて古堂あり 枝を拾遺にして 樓閣乃ごとし
夫當山ハ天正年間信誉上人 空ハ東傳 一名ハ秀翁 の開基にして宗俗
姓ハ三河国松平の出生にして四歳にして父母に後孤子となり
幼少より敏智にして仏道に志願ありしにより十一歳にて
同國大樹寺の室に入て学問に如誉上人に從ひ十五歳にて

美誉を別に武州川越蓮馨寺の圓誉上人のもとにて親
学修練せしに終に師没するにより江府増上寺中興親智
國師の徒弟となりて法宗秘藏を授め神道をも学ひ又
師席を辞して勢州山田原居道をもふ經藏し此時同郡
源福寺九誉上人に名物戒布薩式を授れ 世俗ハ當寺の道場入これなり
夫よりして當国熊野山權現へ奉詣し下向のわかり名州
邦宮郷萬徳寺に將住たまふ其後諸国に經廻の志し
給ひて大和路に於ましたまふに同郡和佐山の禁良乃
かたに宗雲鏈鏈の赫々たりこれ墓ふて其所に
あり見たまふに古堂あり古堂ありしまでなり緣の霊地なりとて
倚なる茅舍に居をしひたまへば主しきりに請しまふれば
すなわち上人念仏を勤め香戒を弘め他力本願の旨を教示
により始に大日堂弥陀一躰の尊名を授得しく 終主

光恩寺
吐前王子
浄土本朝高僧傳曰
小倉光恩寺信誉上人傳
釋信誉字惠傳一名ハ
禿翁道眼明也常ニ
泥視賡緇之繞纏
於世縁遠離浮雲
之榮耀嘗遊化紀
州小倉締茅今之
光恩寺是也性能
詠和歌華晨月夕
以發於思風心頭
無事絆常念寛
永十二年二月一日
十念捨報

逆此や
長寺
土の紋
參麻
泉小の
あらしる
哉
橘仙

藏王権現
明良観音堂
秤　石

石も本意
時代の苔や
神の面
根津　西吟

巌
秤を見る
[illegible]
駅
[illegible]
石見　半扉

其二

津田信楽ありのくん一致ふしく後ハ一寺を建し愛に
止ることなく数年の小石成集めみづから浄土三郎経成迄て
内陣の地中に埋布薩戒の道場とハ十九年冒谷より
常行念仏をたしめらるあに七ヶ年の間勤行しなるを
其長の始に上野愛郡粉川清りん寺の廢せし後中興し
運行ちて改造す運翁に譲りて和州宇智郡滝崎寺は
五条鉄称念ち再興し右堂西方ち西麻護念院にも
志ばらく住し夫より芸州廣岩虎翁寺箱崎信楽寺を
草創し石州濱田虎翁寺銀山西福ち後再営し雲州
松江の信楽寺を創し
[illegible]
同國誓願寺に住し また伯州米篭信楽寺に後ハ隠州
に移住しく浄土宗三ヶ寺を建ることなく
[illegible]
また因幡国取る信楽寺を開基し凡迎歴十二年にして

歳四十九歳にして遷化したまふ府城まさに追慕へ
絶週し一心に念弥陀名號行住坐臥不問時節久遠念不
捨者是名正定業順彼仏願故也文政六癸未歳
弥陀の名號を念ぜば彼仏の願に乗じて性を浄土生と称
のたまはるゆゑに宗風日増に繁昌して永く
布念の浄刹となれり恐るらくは末世の凡夫
こちたくも仏に成生もたまはしばらくの間にて三月初の暁に
沐浴剃髪し浄衣を着し端座に坐し念仏を唱へ遺
偈集念し共に念仏し来下刻に西に向かひて
入寂したまふ人すなはち本堂の西の方にして奉置せり此を以て勿論
しかしながら雲雨をたなびく黒雲四方よりかんばせ今利益百
顆ひろい共にしかしながら近浩関白應山公の
[illegible]

近浩関白應山公の
[illegible]

曼荼羅二幅

社人遷化于時
行歳七十二歳

[illegible]

仲道行授書

[illegible]

山越弥陀の画像

[illegible]

藏王権現社

今在村南の山にあり 水倉大神 相殿 吳宮大神 [illegible] 八幡大神 [illegible]

五ヶ村の生土神御祭九月五日

明良山観音堂

[illegible]

十一面観世音

立像 [illegible]

秤石

[illegible]

津田監物算長
根来寺杉の坊
同算長一子
種子島ふく
狭伯得る
自然斉
松風の
八千世の
宗祇

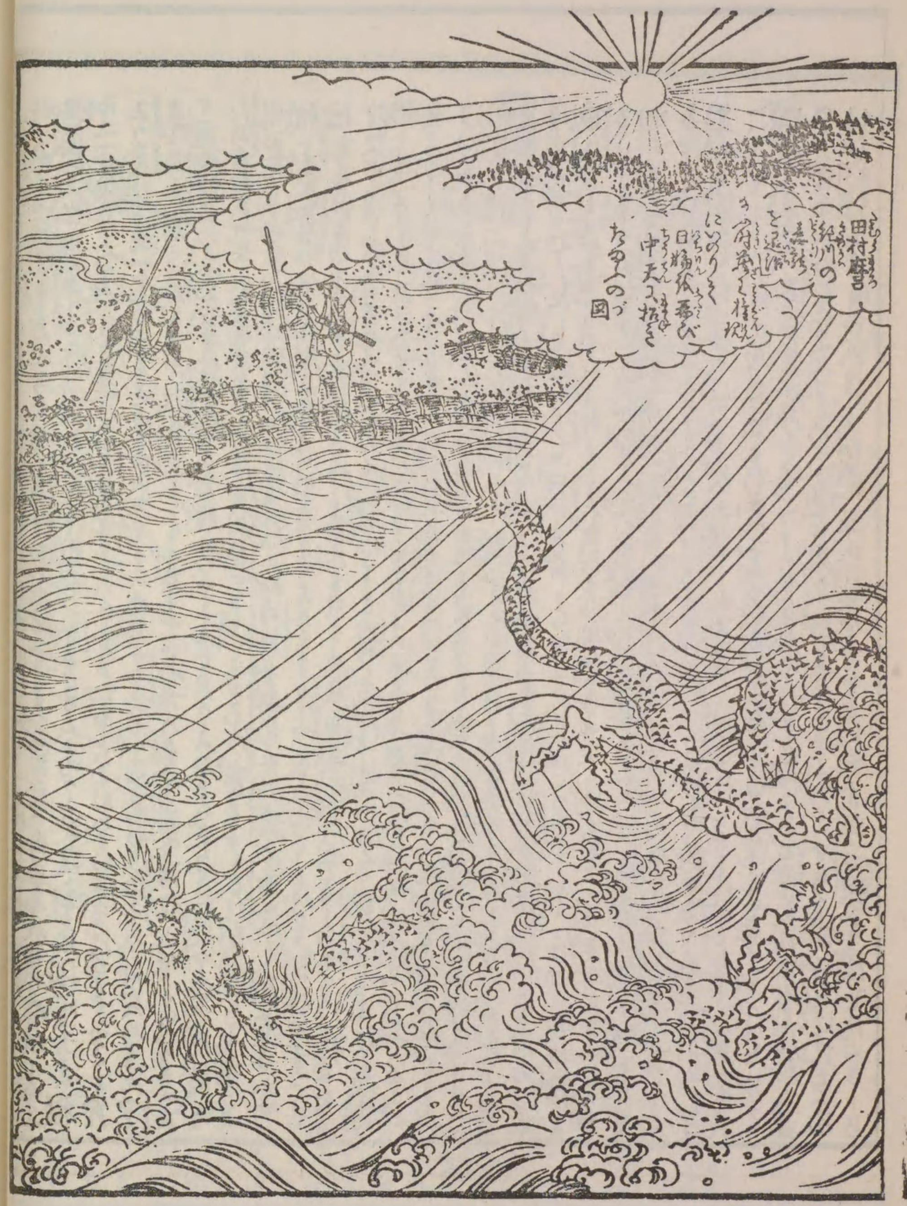
鳥銃
南方一戎器。
奇巧實神哉。
握裏飛輕電。
面前鳴迅雷。
揚弥香靄外。
雁墮碧雲限。
好是威天下。
千秋護紫臺。
山良由

吐前王子社

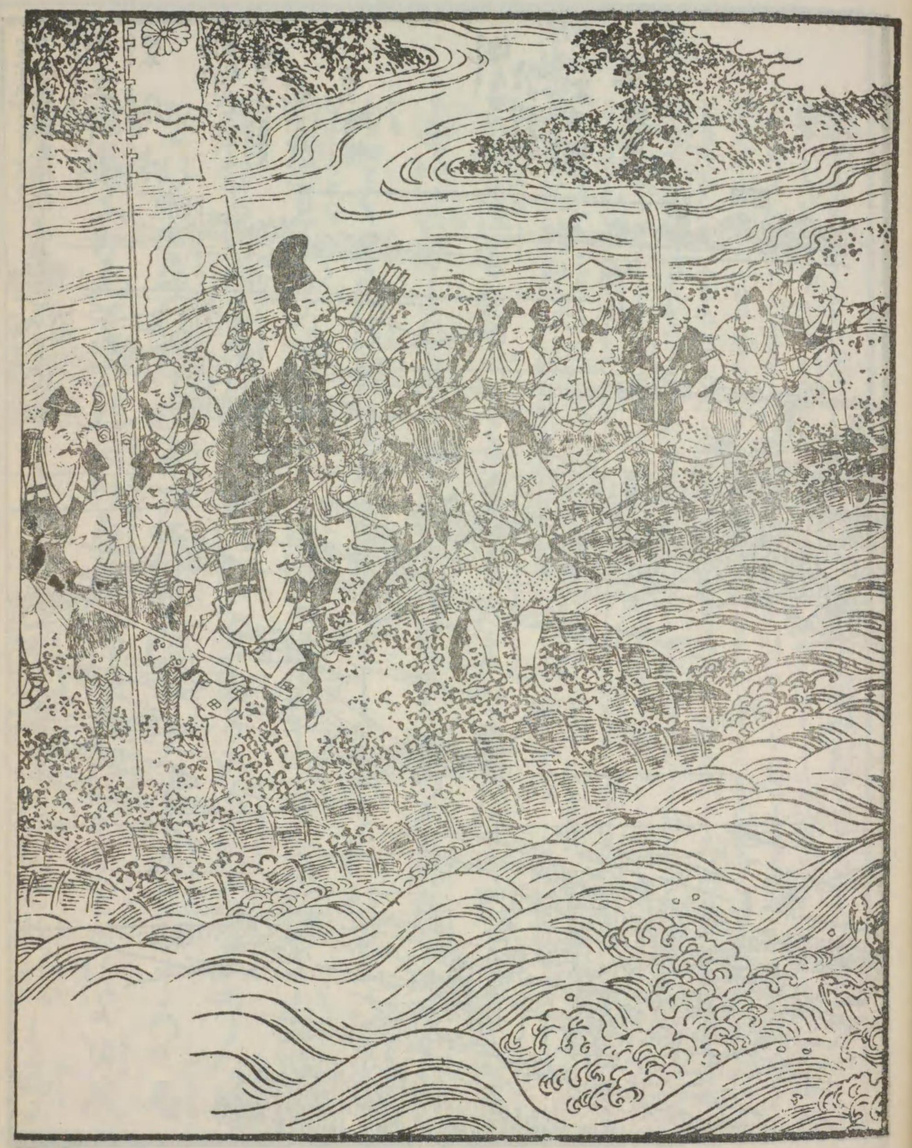
建仁元年然此山御業記云。參山口之王子。次川辺王子。中村王子。次入益養假屋。於此所有非時之小垢離。先參ハンサキ之王子云云

炮術家津田監物筭長宅

[illegible]



田村麿
紀州の
と退
日輪仮
中天
図



日延嶌藏王権現

山王神社

栄福寺

若山鵯梢

洛蝶夢

[illegible]

日延嶌藏王権現社

日延村に三町ありしが

[illegible]

横社

[illegible]

向くに招くる鳳闕に落る紅日の如くまた中天に翻りしかば
権現の擁護もあらはれぬとよろこび終に毒龍
を退治し長く人民の害をのぞきたまひしとぞ此の地に
権現を勧請し竹田崎をあらためて日延岩とは号しとなり
是するより後来将例和田の岬に祭しまた清盛がおもふ所
と同日の談なり

山王神社 山村にあり一村の生土神なり
祀神日吉山王神と同じ

田村将軍塚 同村の西の所にあり今は最寂寺の境内に在り田村麿の塚なりといふ

山王神社 吉田村にあり同村の生土神にして村の内上七社の第一神たり祭礼毎歳九月九日なり日吉山王第一社大己貴命にして大己貴命を祀るなり

金剛山寿明院最勝寺 大同二年九月十七日弘法大師開基ありて初め撰楽寺と号せり

香柏樹 二株境内にあり古木なり寺の記にいはく弘法大師の御手づから植させたまふといへり

捨宮 境内にあり大師当山の開基の時

儀に紀の川洪水にて此所の田畑埋没し大に民の憂なりしかば大師これを救はんと
して祈念したまひしかば水忽ち退きしとぞ

閼伽井 境内にあり大師求聞持修行の時の閼伽なり

当寺は其のかみ大師当寺の山のもとにて一百日のあひだ求聞持修行し

大市姫神社 赤坂内にあり赤坂内の生土神なり毎年九月十八日

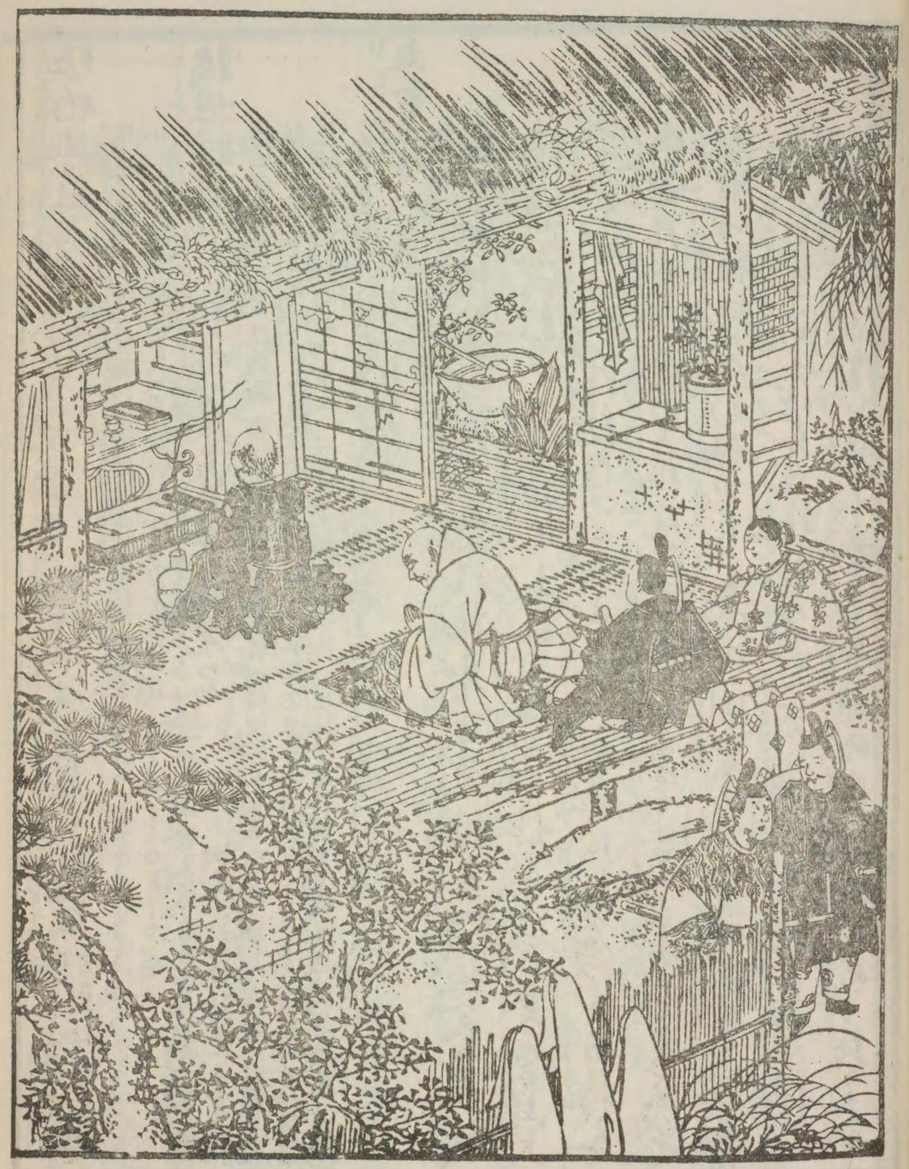
祀神一坐大市姫命相殿二坐 素戔嗚尊大山祇命

末社 八王子 春日神 蔵王権現 摂社大年神社

祀神大国御魂神

当社の往古は久遠の山上にありしを中葉の頃より当社は雷除の守れと出す

後白川法皇
九郎房の懺と
慕ひやかふく
背面より頂
徒しなまへ



佐伯神社 中型村にあり一村の生神にして[illegible]

紀神一座室屋大連公 按ずるに姓氏録左京神別天神

佐伯宿祢大伴宿祢同祖道臣命七世孫宝屋大連公之後なりとみへたり

[illegible]後世佐伯氏の[illegible]に[illegible]しものその祖神とまつるなるべし

橘姓神社 同村にあり 紀神一座左大臣諸兄公 按ずるに姓氏録左京皇別甘南備真人同祖敏達天皇雄波皇子男[illegible]

従二位要隈王男法[illegible]卿従四位下美努王下[illegible]従四位下縣大養宿祢東人女正一位縣大[illegible]

橘宿祢[illegible]大夫人生左大臣諸兄[illegible]等和銅元年十一月[illegible]二十五日癸未曲宴[illegible]橘宿

祢姓[illegible]大夫人天平八年十二月丙子詔参議従三位行左大辨[illegible]城王[illegible]橘宿祢諸兄初

名[illegible]城王[illegible]諸兄公[illegible]

五智房の墓 天が辻村にあり 尼が辻とも

秋氏融源は五智房と称し根来寺覚鑁上人の伯父なり初

より道心のおもひいと深く[illegible]法の関へかくれたりし嘗る[illegible]山上

の雪をいけ[illegible]院内の霧に深く[illegible]念し有待を

厭離し常に無[illegible]権現の威徳[illegible]三山に歩をとゞめて

解脱の径路[illegible]願[illegible]その比関東より一人の[illegible]道者

あり宝前にあらばれて作願[illegible]三所権現[illegible]恩の[illegible]

[illegible]生身の弥陀を拝し奉て生離の要路[illegible]

信心をこしに一七日が程[illegible]しなるに霊[illegible]

滞[illegible]の五更の一[illegible]は誰[illegible]微妙の[illegible]

汝生死の如来[illegible]と[illegible]に[illegible]を求[illegible]

囲根来[illegible]五智房[illegible]の弥陀[illegible]

[illegible]不思議の雪[illegible]

[illegible]清[illegible]餘[illegible]

道者は随[illegible]法[illegible]下山し

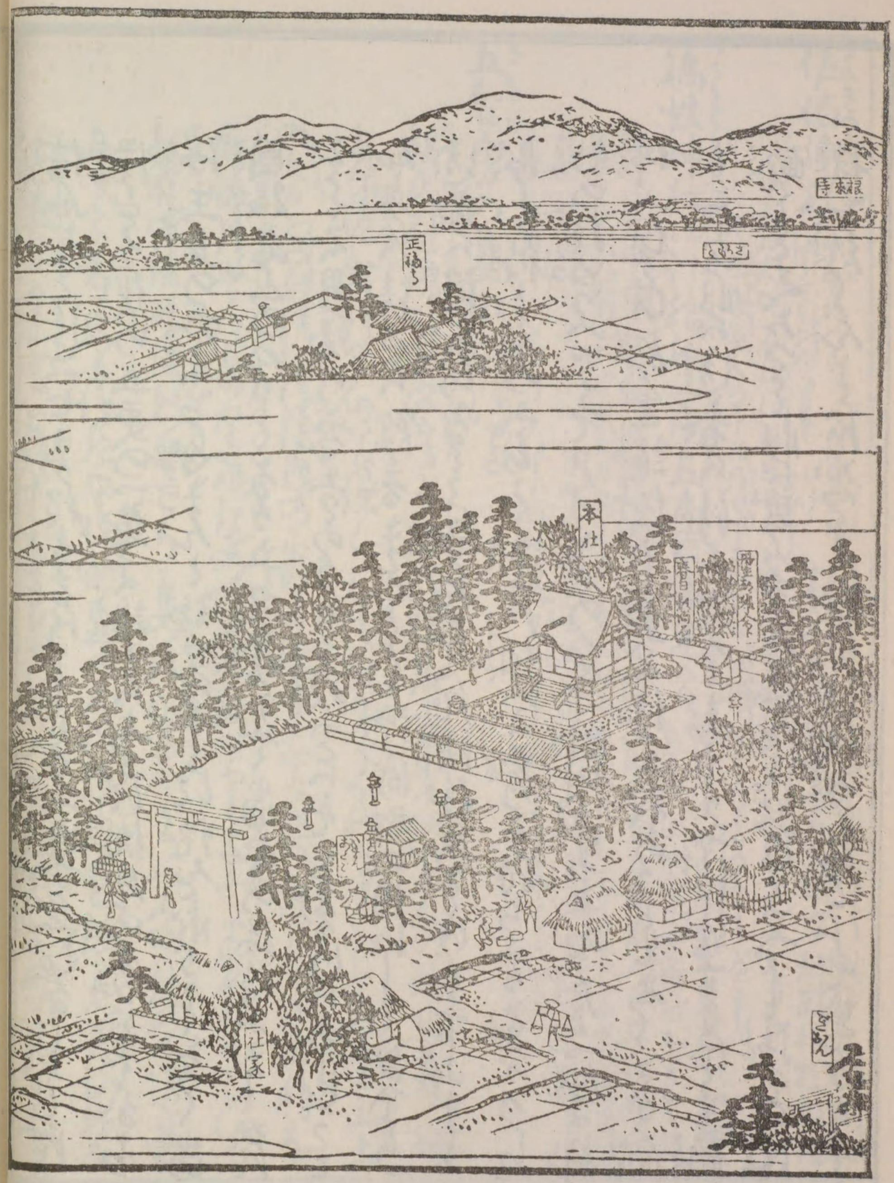
即ち彼[illegible]

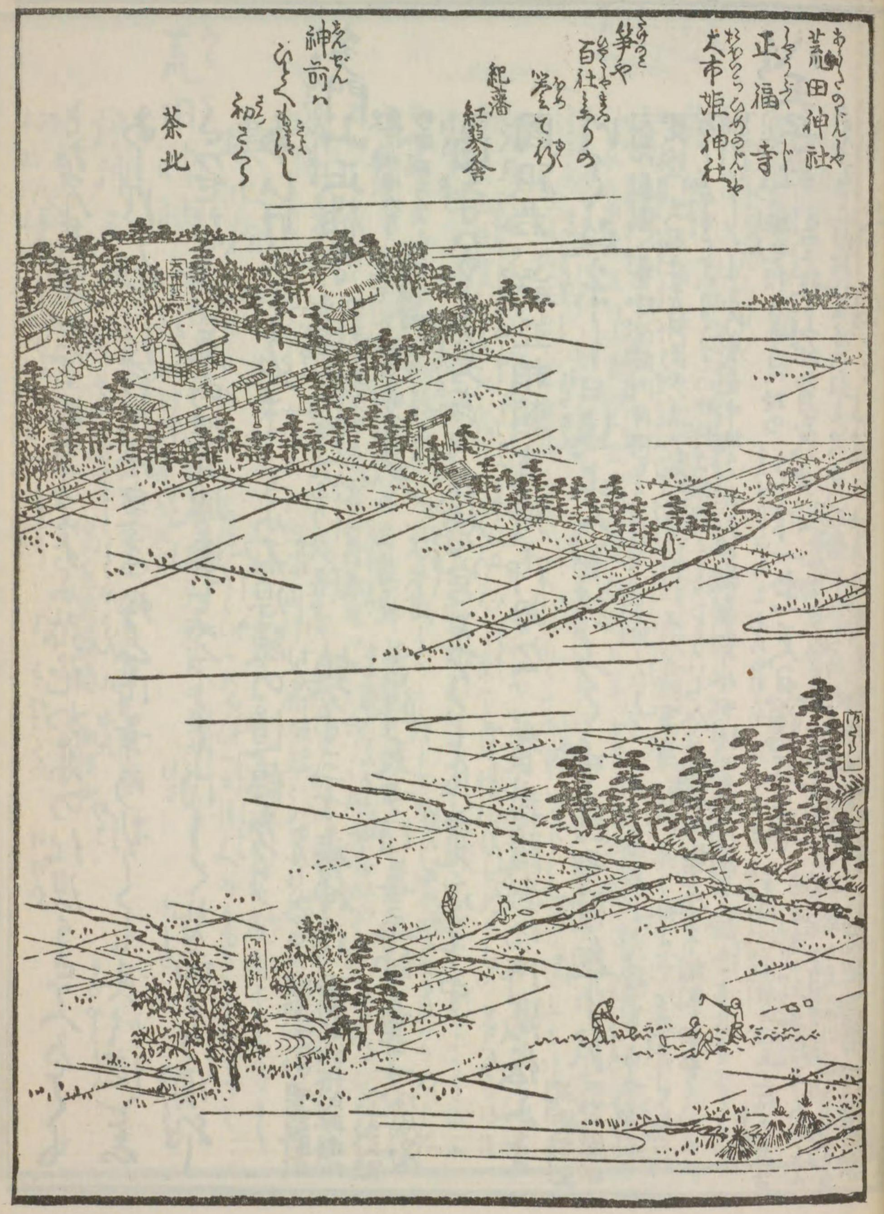
竹の[illegible]の戸に五智房一人を持

仲[illegible]更に傍に人ありとも[illegible]面

[illegible]道者は[illegible]

[illegible]




荒田神社
正福寺
大市姫神社
筍や
百社まつりの
巻て行
紀藩
紅蓼舎
神前は
ひとくも清し
初さくら
茶北

とあれば其道を堅固なる実に弥陀如来の化現うたがへなくも
あらばこれは後白川法皇高野山御幸の折りしも其法越を志
させなまひ草の樞に鳳輿とめぐらし同しく背面より頂礼
あひけるとかやまことに不思議の道徳なり

多門山正福寺 曹屋村のぐらにあり 沈花宗 甲斐大堂山本遠寺に属し 鎮守三十番神祠 義應中村甲増田氏造立 正徳中桃井氏再建此
家に永禄六年の碑石あり 本尊毘沙門天 立像長一尺六寸 吉祥天女同善尼師童子 以上共に安 ほ原の作

[illegible]寺はもと真言の古梵宮なりしが寛永年中
國祖君 前亞相頼宣卿御母公 養珠院殿の御後依によ
りて改宗し日遠上人と請ひて中真の開祖とし 親迦多宝 四菩薩四
天王の尊像 養珠院殿御持佛なるを安置ニ生納したまへり○此寺旧名を荒藩堂といふ本尊
毘沙門天服士吉祥天女善尼師童子ハ往昔日増菩薩和州漆下郡に一宇を建立して勅請
あり本尊之志なるにその地終に城郭となるをいたり今の那山の城これなり城成てまや
城中にまじくなるべき慶長中城を没落の後高地の村甲増田氏荒藩堂に移しまゐり

八王子社 田毛村より六村の生土神 [illegible] 九月九日 祀神一坐天忍穂耳尊 本国神名帳に日正三位正哉吾勝勝速日天忍穂耳大神とあり
えてらこれは八王子の社といふは所謂天忍大御神建速須佐之男命と天安川にしまゐ
[illegible]

勝勝速日天之忍穂耳命天之菩卑能命天津日子根命活津日子根命熊野
久須毘命以上八 [illegible]
とも相殿にまつりなれば
かくなまつりなり

旗井 社頭よりこゝにもいさゝ井の中にあり [illegible]
[illegible]
赤井ともいふ
社家舊記にいふ當社は天武天皇白鳳元年七月三日御鎮座 [illegible]
[illegible]
白川鳥羽両法皇[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
勅許[illegible]

輿止松 五十[illegible]
[illegible]

荒田神社 廣田庄[illegible]
[illegible]

祀神五座 天蹤向津姫命 息長足姫命
應神天皇 高皇産霊尊 [illegible]
延喜式神名帳曰荒田神社二坐
本国神名帳曰従四位上荒田神社

摂社丹生都姫神社 勅社のこと ワレにあり 春日神影向石 同所にあり

末社 八幡宮 愛宕橋見 紙園社

御手洗池 勅社とり 西にあり

拝殿神楽舎 社前にあり 御旅所 勅社とりにし 三所ともにあり

社傳ゆゑ當社ハ天照皇大神のわかうゑたまひとこれ

神功紀に津のくに廣田の社ハ天照大神神の荒みたまと

いへるより此の地をも荒田とよぶるにとりてやがてかく

くるいへるとれがし志りまとも荒田とあらそたまへ

隈どをくもあらはあんとなに日本紀誉田天皇二年

三月立仲姫為皇后。后生荒田皇女。大鷦鷯天皇。

根鳥皇子云云 荒田とあるはなほ古事記にとるなほこの天皇の妃品陀真若王女中日賣命を御子ホ云荒田郎女をいまして旧事紀ニ云ふ誉田天皇二年。立中姫命。為皇后誕生三児荒田の皇子。次ハ大鷦鷯命。次ハ根鳥皇子云云これは一ハ皇女とし一ハ郎女とし一ハ皇子とし一ハ皇女とし志りしかし日本紀にしたがふ

皇女なまれまはにやまして延喜式神名帳に

二座と以ゆるはおもひに姓氏録にいはく荒田直高

魂命五世孫劍根命之後ちりてこまにとる

とはそ荒田の直が祖高魂命および劍根命ハ

の二座なまれまるにやわ泉のくに陶器庄荒田

神社二座ありこれ同神ちなへし志ばらく ぬるは

弄しくのちのかんくに任ひとて當社のいはし

へを詠ひる書域も以て廣大にとしこの名ハ

もまた嚴重にしく神輿の渡幸鏑流馬等

のしれ容易ならざはしてあるましに天正のこ

ろ根来寺の一ゆうくとしてとりにそはく鳥いう

とあり。いまは十ヶ一にくその光景をしるよし

もあらはそのしけり

御船神社 にし 祭礼六月廿日

祀神三座　天右王命　手置帆負神　彦挟知神

この地はいつゆしく根来寺全盛のとれはこの境内はくあり
しは五百十三年のひやうくはかくまく荒廃は乃ふ
根来しはやすく桃折敷が長久のとりくくとこれ
はよびたりし蒼田愛じく海とあるはこのあたり
の事なるべし

住持地　はむらのきさはあり里諺曰むらしよりこの地は大蛇をんぐ人民をれ
びやうしとうとく限りたりし志かりは康和年間のころかとは西坂本乃
なるうれ室谷右兵衛尉忠家とて庄園あまた領ぜる豪家ありひとりのむすめ
とりてうしなをかつてくいへ容色をぐれて二八の花乃いろぶりしまたいづくのくれ大たる
源藏高廣とて北面乃さむらひありこのむすめをつねにむかはんとて此いけ乃
つくはとてうしはいはゆる悪雲むらがりて震動しく天地もくづるがとしその
中より大蛇をたちたりの男子と化しかのむすめはいづくとぶかとて池中はいり出
両しんちげれ源藏はかしむことおれかたるはいかりたまへ
士卒はもちたく地をかしつゆ大蛇をたいぢ志かしよりこのうへ人民
害をまぬがれ田薗のやしなひとはなりかの忠家がすゆうをもてろ
のつけたりとて庄司がつけとよびしるあれは堀やんあやまりくだろ
ぢかけやいひたりはせてのつけの山はむとけりしはありてまは大
地乃霊なりとて祭祀を

根来山　山寄荘阪本村の東北にあり　西阪本は和歌山より詣し東阪本は和河より詣しとなり雙方共絵舎あり

○一乗山根来寺大傳法院　根来山はあり　宗旨は古言新義

峻峯下盡處便到梵王臺風度山鐘斷雲深谷鳥哀
紺園已蕪汲画壁羊摧頽寂寞松門路從人訪古来　福世議

傳ふむし役優婆塞神變大菩薩葛城に鎮行の此根来山
来て勝地なるとは愛して秘密一乗相應乃霊地なりとて自ら
斧なめぐし即自らの肖像を彫刻し山林をして護しめ
なまへてかや　此像今護摩堂におんちれ　厥后堀川院　人皇七十三代の御宇寛治年中
修験行者根来坊といふ人あり　根来坊は紀勢のくにの人なり　宗家の一寺造立の志
願ありて那智山の滝に籠ること一千日屡行念せし夜の夢に
根来山は宗教相應の霊地なり一院を草建とべしとおしへ
ゆまへて告あまべしとあるかち此地はきたりて行者堂のうたりは
一宇は建立し豊福寺と号し本尊虚空藏菩薩を安置

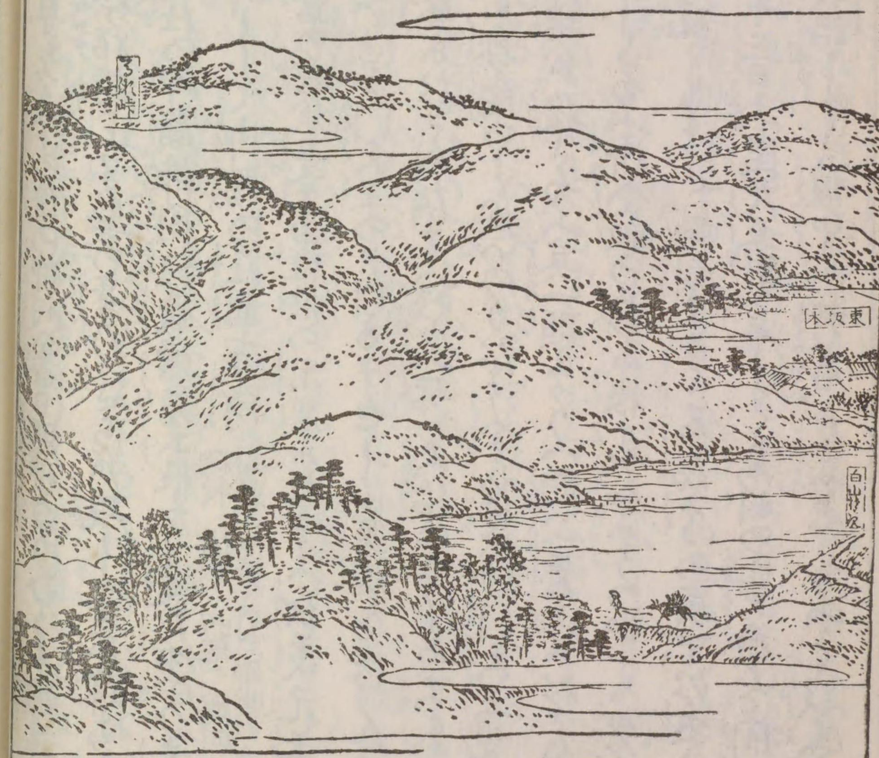
後は真教大師 覚鑁上人 當山は来りて法幢をたて法雷はとどろき
角僊の兆空しからざ仰べし驚ひぬし 根来坊の事跡さらなれば根来山にはたるまくいつれ
大傳法院 一山の中央にあり
本尊大日如来 長一丈八尺鳥瑟は鳥羽上皇の御髪をこめらる 花金剛薩埵 長を丈六尺侍賢門院の頭髪と座下は
瞰たく 右尊勝佛頂 長を丈六尺花跌は美福門院の髪髪をこめたくまいる
原當山の本願は真教大師 鳥羽上皇挙て御願寺としたまへ
えじめ天承元年高野山に御建立ありて後百五十八年を歴て正
應元年根来山へ移を抑本願真教大師諱は覚鑁正覚坊と號
高野山にて密厳院を立て住たるに是より世の人密厳を者
とも奉アたる俗姓は肥前州藤津の産にして柏原の帝 桓武天皇 五世の
孫平将門属胤伝統平次兼元の第三の子なり 小字は弥千歳丸 もとは
橘氏なりける此爰津の御に仁和寺成就院寛助大僧正にしるよし
しかれしはれば学照法門をしてそる者はめし南都に老いて

倶舎唯識は窺ひ華厳法相にをまかだしめたるに春日八幡然野の
高野の神に護持したるにてもあれば祥瑞気し又弘法大師早く
寺にかくしたまへよりて天承元年十六歳
にして寛助大僧正にしたがつて剃髪染衣しく沙弥戒はうけ十八
契印両部の大法志はしめ行ひたるひ保安二年九月廿一日成就院
の道場にして両部の灌頂をうけたまへたれは眉見より白光は
さあら堂内をてらし大治元年永尋阿闍梨の勅にもとつて真隆の
志願崛起して大傳法院を建て傳法大會は執行し密教を
恢弘し羣生は利濟せんとは因て東寺に寄寓して稲荷明
神に行るをかいち明神の告は蒙りて高野山にかへりたまへたち
芳野川の辺りにて老年の荘の契券を拾ひ得て遺者を訪て
ゆしたまへ券主なる者のこころざしは感じて岩手の荘は為
者に寄附したる是年根来山は相いしく伽藍を建んと

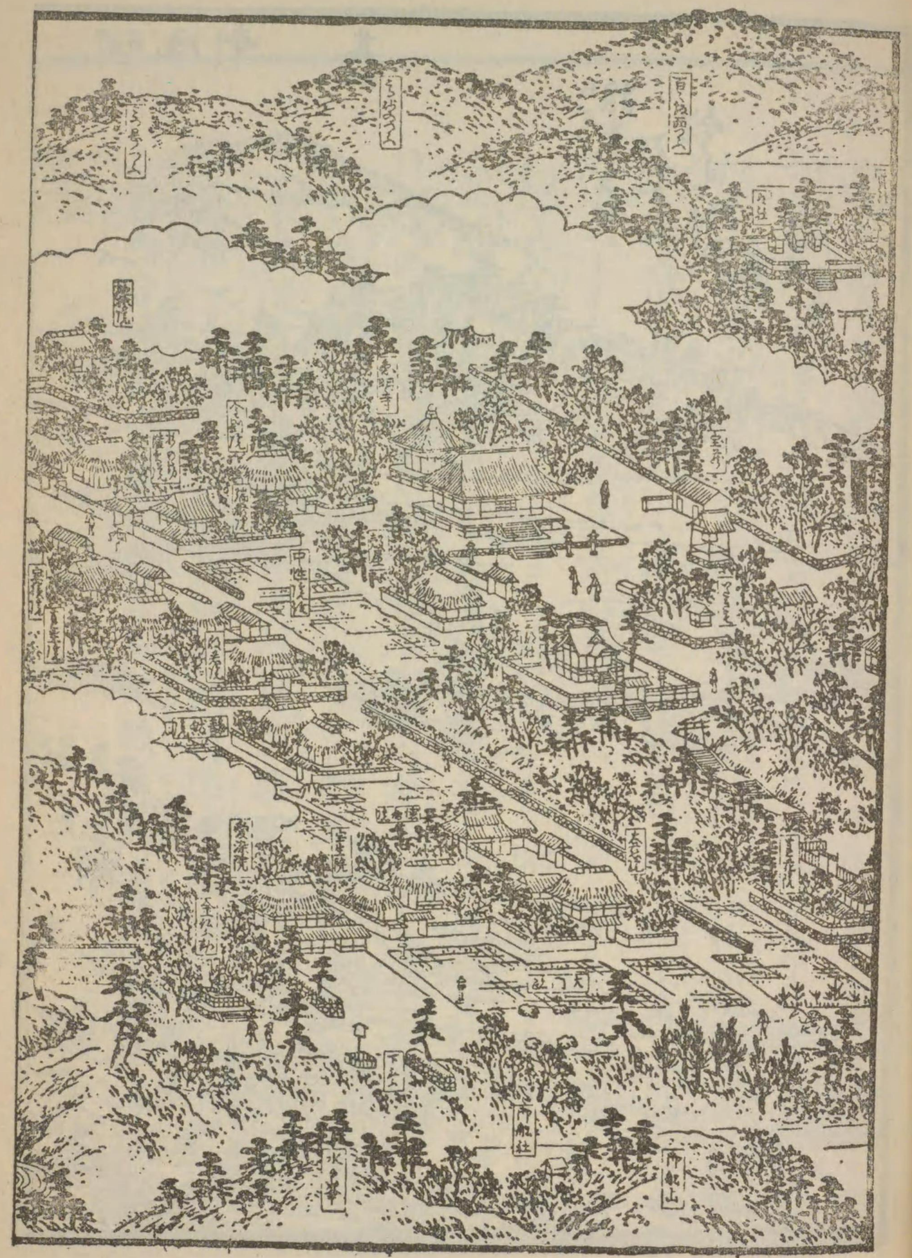
欲し先一祠を岩手の庄に営立しく日本國中大小の神明一千餘社を勧請しく三部権現と崇めまゐりて以鎮護とし
とれは白山権現像をあらはしく吾上人の善願を随喜しく
影のごとくしてさゞひく衛護をとく宣ふことはよるまく別に根來山
の巽のぬきとに一廟をかゝへく崇まつる大治五年花藏院聖
慧法親王高野山に詣したまへとれ営奥の事は聞めして
鳥羽上皇へ奏聞あり院をかゝら勅しく御願寺とし傳法
院日ならびしく如丈六の尊勝佛頂を安置し学侶二十六口を
並後に小傳法院といふことはあるさまは狭隘にしく大會を行
ひ難ければ更に奏しく大傳法院をこそらる十月十七日御
法密厳門日に落慶を曼荼羅供養を設く此日上皇臨幸
したまひ夜に入て大傳法院にてはじめて傳法大會はおこなふ
其密厳院は今者常居の室にしく本尊は弘法大師御

作の不動尊なり下の院の神行は春日明神なりむし推護の約を
はりて今招請をて髻の童のうちは現じて来降ありて法座
を三部九社の神廟佛閣經藏僧坊おほくり建たまへり大傳法大
會の供料として御賜の荘園七ケ所 石手 弘田 山寺 岡田 山東 相賀 志富田 又別に
遠見初倉の荘は曼荼羅供の用度にたまふ長承元年紀性
の珠を造りて門天王のさゞけもまゐせし寶珠をはこんく不動
そのうち鳥羽にはさゝめたまふ此宝珠は大治のはじめ大和の信貴
山に登て奥隆のことはいのりなまふとれ毘沙門天王現形をして
三顆の宝珠は授たまふ其一顆なり一顆は一乗山にはさゝめ一顆は自
身護持したまふ御入寂の前は根來山にうつむとも岩手の物社
の玉塚に埋ともまゝ緘封しく不動そのの厨中は並ともいふ同
二年七月十三日上皇ゆゑ者をめしく鳥羽の寶藏を開閉あるさめ
なまひ又詔しく藏中の所有ものはしてゞふく投与なりさし

東坂本村
白山大権現
菩提峠
女人堂不動
信貴石
愛宕権現
地蔵堂
朝雪や竹雲へ
りんとんねと
杖の音
若山
春笆



其二
大傳法院
雖須不動
大塔
光明會道場
圓明寺
御影堂



めんとおりる者さかいち高野大師手画の等身の像と善
女龍王の画像と二鋪を請ふくたるゆゑて持ちへりて寺鎮とし
たまふ相國忠通公青龍の感夢奥福寺の珎也が懺悔八幡
大菩薩の偈を誦く禮拜し上皇白蓮の殿上に生ぶとゆめ
りたるしくかゆゑ尊者の象内に志ろし召まさ五藏の祕
観に入さるへは賓生あさり化現しく暗言しくるゝその餘
霊瑞ちかいと多し長承三年冬十二月上皇詔して傳
法院の座主とすべし金剛峯寺の座主とすべしと云
可永以大傳法院座主職即為金剛峯寺座主令知行満山
事被院宣偁自今以後永以件院座主即為彼寺座主可令
撿校一山知行満寺仍供僧所司等中有闕之時座主擇器
可令定補満山諸徳宜承知不敢違戻者院宣如此悉之以
狀

長義三年十二月廿三日　右兵衛督源奉

座主御房

保延元年尊者四十一歳営建の願満足し傳法大會兵隆佛法の基本已に成立しぬ茲年金剛峯寺大傳法院両御願寺の座主職に持明院阿闍梨眞誉に譲て密厳院に閑籠まて三摩地を修しくれんしたるが二月廿一日より後は堂外に出てゐるにても月を越てようやゝ雨まとりたるもの間より窺ひ見れば不動明王とかりて迦樓羅鯰の中にぞおはしたりかくてたれば四十五の御年より密厳道場に坐しくはさらも動たるに門内へ他人の出入をいましめ唯兼海竜玄等両三人の外は御身近く参ものなしされば金剛峯寺の徒衆嫉疑ふて正覚上人入滅しく年に経まども徒弟に院務を貪まくはさ藏なるべしわれ戸をとゝめて入定と作るなりんいざや押入て定扉に撃

破り玉枯骸に撃出して死しむべしとて先院の廳に参ひて曰正覚上人滅しく已に彌数年徒弟に詭計はさ藏して矯誣聖聴云云二月十六日尊者定より起て手書を上皇にまるとかいち宣旨に云属日有浮説而傷聖襟忽手状至天顔大怡云云四月二日大傳法會の散座に為者席に臨ぐ秘教の妙義を演たまふ数百の聴徒歓喜して涙をたるく其後まて出てゐれば保延六年十二月七日兇徒等の諍訟によりて（時有金剛峯寺の徒與大傳法院の衆論訟相賀界不決者久矣）園寺の衆及荘園の壮丁等数百人に於あつむ大傳法院の徒五百餘輩此奸計をきて防ぐ戦んと議に為者定を出て制し止めて云暴悪のともがら監入せば汝等をて出さるべし兵杖執ばかれ沙門の作業にあらば防戦をるものあらば永く教法を擯出すべしく厳に誡言勵しければ人々に涙に流し歯を切て退去

不動二そるの肉本材と
肉或ひ錐鑽しこく
木像より血ちぢ
まて咒徒抵
觸れるもの

八日の昧爽光徒等密嚴院に競ひ入て定軀を拏らんとするに
不動する二像相ならんとする相議しく云木材と肉身と雖鑽せ
ば其實否發覚せんとて矢鏃をもつて像の膝に鑽るたらゐ
血なるにしく地にいたる尊者此歎しく自ら鉢をあげてそまに本尊
なるを過すか鑽いてにあり兎も角も斗へて定に出させたる光徒
に木像の血滴てたるにしく身の毛いよたちたる者の威儀にして
敢て抵觸するものおつしする者は明日に荷負しく根本におもひに
たまふ數百の清衆皆する者にしたがふて根山に來る今密嚴堂の
本尊に雖鑽不動と称するは是なり此する像は本弘法大師彫
刻しく東寺の西の院に安置しするを其者東寺に寓宿て
手自此像に挽刻しするに美福門院聞召て本に摸との二像を宮
中にむかへ禮拜供養しく摸像に東寺へ本像を密嚴院へ送
送らせたまふ其挽像現に東寺にあり寺衆の暴悪者く天聽に

遠しく巨猾宗玄玄信覚玄に二十六人を捕へて三衣を脱しめ
俗にかへしく遠者に配流に兼資にの其余人は其者の弟子と放
て薪水の役を勤むべしく誓紙をもつて罪を謝するものにて
二百九十五人満山の僧侶艸のごとく麗に依にて上皇
尊者に勅しく野山にかへしむる者養しく曰愚昧之徒
於一味法海抱彼此別執ふ輙示化根來山者役優婆塞經
行之霊蹟形勝不多減野峯所以自大治初豫開基趾伏望在斯
勝壤永徴禪波奉祈宝壽天長國家地久云云勅して免許しまふ
淨侶にしたる高堂傳法院にかへて住しむ春秋の大會合山の諸規
をのごとく執行ひける根本に圓明寺を創建に上皇命じて御
願寺としたるに佛塔神祠経藏僧坊等數十區を造る永治元
年百日の間求聞持の法を修行しするに詰願の日御山の山に五百
の佛面地より涌出に其所をそれより求聞持のこゝ○ともまた

五百佛說のこゝろとも云ふ我常は圓明寺の西廂に坐して梵字の秘規をこゝしたまふに金色の阿字壁間に炳現して室の内照耀なり
まゝ堀の内の坊にて月輪觀に入る堂前に善徳竜王の小池あり
一夕月輪水上に現ぜりこゝろ二尺ばかり御弟子達本版に摸して
とゞむこれより堀の内の坊に月輪院と号ぜ其版圓明寺にあり
とゝ康治二年ゟ者四十九歳七月廿八日たらまち風のこゝちにあるせ
たまふ大衆ゟ勝多羅尼を満平愈をいのるゟ者日生死ゟ世常
ゆくより誰かよく免れん只速疾成佛をいのるべしと十二月十二日
圓明寺の西廂に結跏趺座し手に秘印をむすびロに密咒を
誦し禪定に入がごとくして終に声収て息絶ぬ生涯四十九歳
化縁の薪たちまちに尽く五時の説いまゝ満ざることを傷ゟ濟
度の船をでに志げして雙林の朝に先達とをうしむ山鳥梢に
啼こゝに別離の歌に副嶺松嵐に咽こゝに哀動の声をたまとく

徒衆あつまりて號哭し細白ありて傍泣しく入滅をかふ
しぬざる者はなかりけり 已上根來寺縁記大意なしかに

雪玉集

天文二年四月廿一日大鳥の社信田の長などいふ取ども有るそ
いづくの祭にか社のあるまへに輿かにまへる木へ根來よりの
迎ひとて馬二疋ひかせて人のおゆこ走て來りて食籠錫
のものあどもさせたり思ひかけどもむかへ侍りしかの寺の
十輪院といふに當時一山の学頭碩学のきはいえありとあん
坊にはきれ入灌頂をおこなひて後朝のいとなきこゝにかれば
弟子の實相院といふ坊にとゞむへによしの案内となん兎
角して根來にいたりたるとしに衆徒十人あまり立ほらあり
てむかへ入ぬれよしあり猿のやほとおりひかけぬとに待ましば
さぬぐ色代しかへして輿をかゝ大門のうちまた入たりし

後にきけばわるべかりける所に侍るとたんかく遊ぶ諸堂巡礼し
侍る山中見る物のごとくにくかたちにてさいふはかりほ本堂
傳法院にてくはりひはぐけ侍し
高野山口かれて已もおとさるに法は侍へん世々の為も　内大臣實隆
雖ゆゑ不動を拜見しとく
動さまた身をつけてなる姿そと血の涙ともおもひてぞる　仝

續後拾遺

夢の中に夢も現も夢なれば覚るに夢も現とおもひ　覺鍐上人
此頃はわりひ出られて
いつさめん現も志は七十のなつかに同じ夢の世のなり　内大臣實隆
実相院といふ所につきてこれかれうちや
すゝめるなど初夜の鐘はきこそ
あけまさいそれく出ひかり花ゆしはなるのかの聞なり　仝

あるとは鳥羽院御拂物の御鏡を上人にまゐらせたまへ上人是を
賜ひてく奏しかされなり
真澄鏡うつしおとさる姿をは誠に三世の佛とぞ見る　覺鍐上人
太上皇の御かへしに

續千載集

をしなべて誰も佛にたりぬとは鏡の影にはふ社にて稱

西行上人撰集抄云

近頃ゆうやのことに覺鍐上人とくやむとて那美ひじりをおもひなり
真言宗にさかりきはめて一印頓成の春の花は月に寂寞の霞
の夜にうつし禪心合掌の秋の月にひかりを無垢の心乃うちに
てゝして弘法大師の昔の跡をおいて傳法院といふ宗にさく
龍花三會のあかつきをまちて入定しさまへつけるとかや　中略
しにいかゞる初座のあるものなりともいかゞ大師の御まゐを

しさくハ行るべきいさ傳法院へよせ後覺鍍の入定さぬさんと議して
後ハよせにかう覺鍍の門徒ふせぐべきかなくちかぐに成行ぬ
本地の僧入定のところに乱入くるゝに不動尊二粹ならしほけり
一粹ハ覺鍍の日ごろの本なるの不動ゆくなりしまして今ひとつハ
聖の化しるゝ也ゝ其内但しいづれく見ることがしいかすべきとなるひ
なるにある僧の一粹の不動をさぐつたり行れば少しあてうにならし
けまいまれば覺鍍よりて出力にくきりなれども参きれざりなると
行ふにていさくきる行に覺鍍定さゆくほゆくきられなまゐり
かうまなれば人くの谷にかつりなる其後覺鍍ハ如にもまうやゐ
けざう那家此所にとゐじとて紀伊國根来といふ文に庵を結び
ておはしなるが四十九といふなる十二月十二日あん往生の素懐とこげ
なるへ至とるん緒も書置さるへるとの中に禪三昧のとれ事を
謗し家をうらなりしともがらとゝべくそだゆうまくにおりふこと

しし信に謗けく利せんとせかされれば此ことゝにしたゝに身に志
ぞてたうとくぞ侍る 下略 今按 光復定さゆてほゆくこそれゆつりといふ
文ことゝにハ脱文あるべし上件等侍るて略之

○什物品

一 鳥羽天皇御肖像 開山大師筆 一鋪
一 開山大師影像 鳥羽上皇御筆 一鋪
右ハ南龍院殿御拝覧奉稱薄衣御影
一 両界大漫茶羅 弘法大師御筆 二鋪
一 同 開山大師御筆 二鋪
一 同種字 同 二鋪
一 佛舎利
一 不動明王大御釼 長七尺三寸 廣三寸五分 文珠金助重國作 一振
右ハ南龍院殿御寄附
一 散樂假面 二百餘面

右　前中納言太眞公御寄附
其餘繪木佛像佛具世具珎器等羣尾しかし

○住古堂塔大概

大塔　五間四面高サ十八間　空輪二十間余　本尊金大日如來　長三尺四寸五分外ニ十三尊ありしとあり今二種そんれ
大師堂　三間四面　御影木像　長三尺六寸　不動堂　二間四面瓦葺　長四尺六寸　經藏　竪二間　横三間
阿弥陀堂　三間四面　佛長三尺　鐘樓　中門面五間　多門天　持国天　穀屋　湯屋

右　大傳法院境内にあり

錐鑽不動堂　五間四面八角作　内陣ハ圓形　本尊不動明王　長四尺六寸　弘法大師作　樓門
求聞持堂　三間四面　多寶塔　三間四面　經藏　二間四面　地藏堂　本尊地藏菩薩　長三尺四寸
春日社　檜皮葺　下院ト云　拜殿　竪五間　横三間　鐘樓　穀屋　毗沙門堂　天滿天神

右　密嚴院境内にあり

御影堂　面十七間　妻九間　中尊覚鑁御影　上人自作土像　長三尺一寸五分　左服相應不動
右服尊勝佛頂　三部權現　三間四面　檜皮葺　華表　梵種字

伊右祈曾社　御藏　鐘樓　樓門　中三門　透節六間

右圓明寺境内にあり

豐福寺　五間四面　本尊虚空藏　長二尺五寸　藥師堂　三間四面
千手堂　三間四面　鐘樓　中門　地藏堂　開山堂　役行者堂あり
九社大明神社　御正躰　三社一社　各三社　拜殿　宝塔　荒神社
三ヶ合九社あり

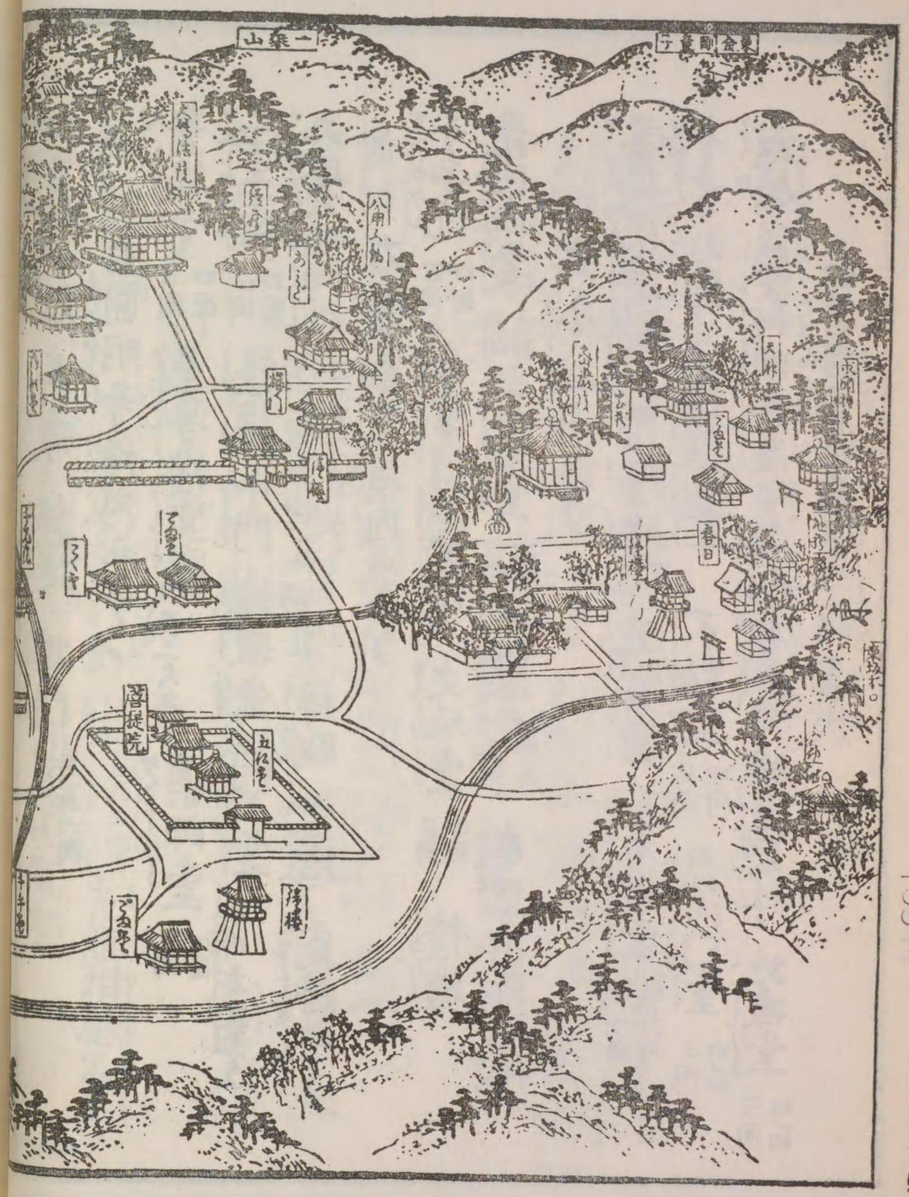
右豐富寺境内にあり

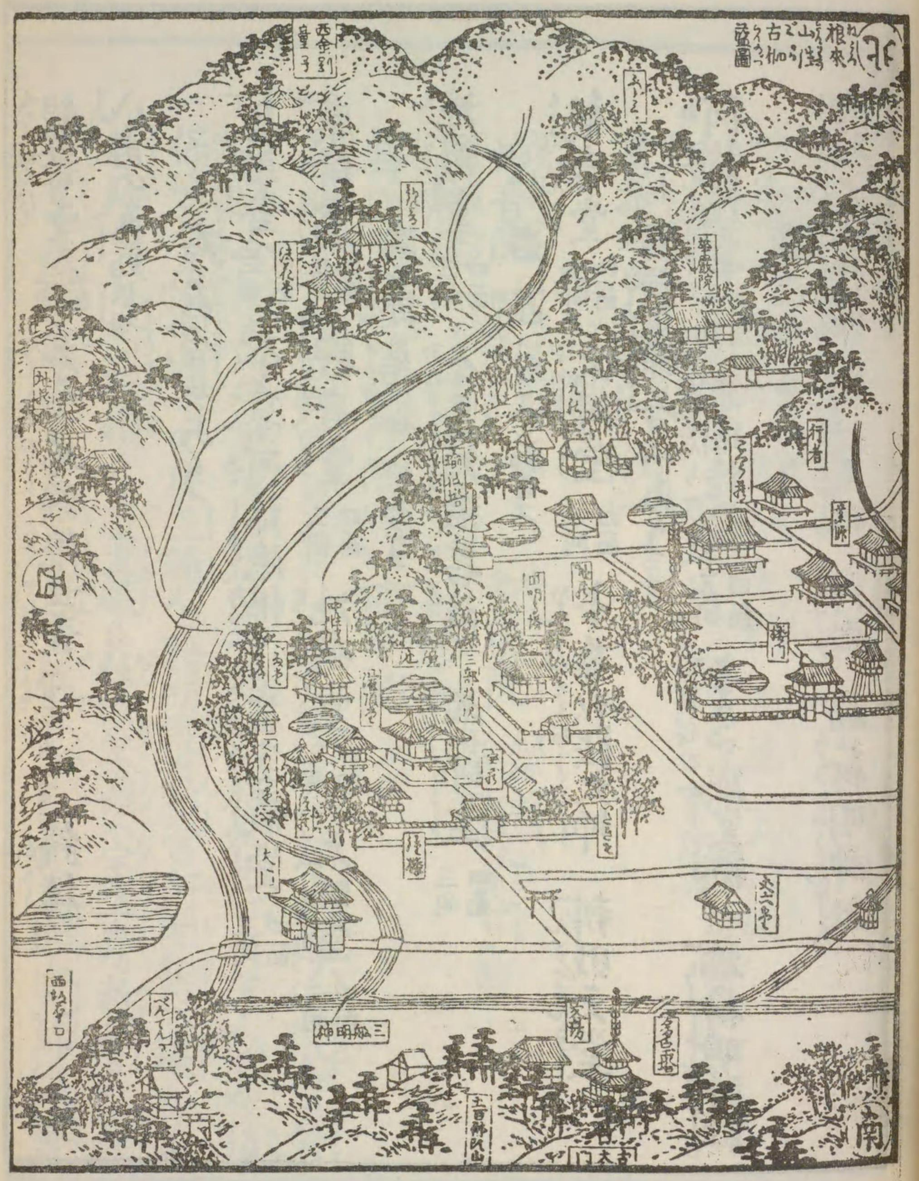
千手院　三間四面　本尊阿弥陀佛　文珠堂　三間四面　鐘樓
毘沙門堂　三間四面　不動堂　三間四面　丈六堂　三間四面　本尊阿弥陀佛

右小谷にあり

菩提院道場　護摩堂　五智堂　五佛堂　竪二間　横三間
本尊五佛　辨財天堂　不動堂　三間四面　毘沙門堂　三間四面
穀屋　稲荷明神社　岡伽井表　辨才天社　地藏堂　三間四面

右菩提谷にあり


一乘山
東金剛童子
八角大師
天神
春日
菩提院
五仏堂


北
根來山
古伽藍圖
西金剛童子
華嚴院
行者
三船明神
西
南

観音堂 三間四面 本尊馬頭観世音 長三尺一寸 鐘樓

八角の不動堂

右大谷にあり

五寶堂 三間四面 本尊阿弥陀佛 虚空藏堂 三間四面

藥師堂 三間四面 観音堂 三間四面 地藏堂 三間四面 大師堂 三間四面

右蓮華谷にあり

地藏堂 三間四面 本尊地藏菩薩 藥師堂 三間四面

右西谷にあり

観音堂 三間四面 大師堂 三間四面 本尊弘法大師 辨財天堂

右菖蒲谷にあり

阿弥陀堂 三間四面 求聞持堂 三間四面 本尊虚空藏 稲荷明神社

右三岡にあり

御船大明神社 辨財天社 拜殿 稲荷明神社

右前山にあり

一山境内 南十一町半 西十二町 北二十一町 東十一町 大門 大橋 大門池

番屋坂口 未申のかたに無愛天往あり 下馬口 成丑のかたに金剛童子あり 百坂口 東金剛童子

菩提峠口 辰巳のかた不動長一尺六寸 覚鍛上人の御作

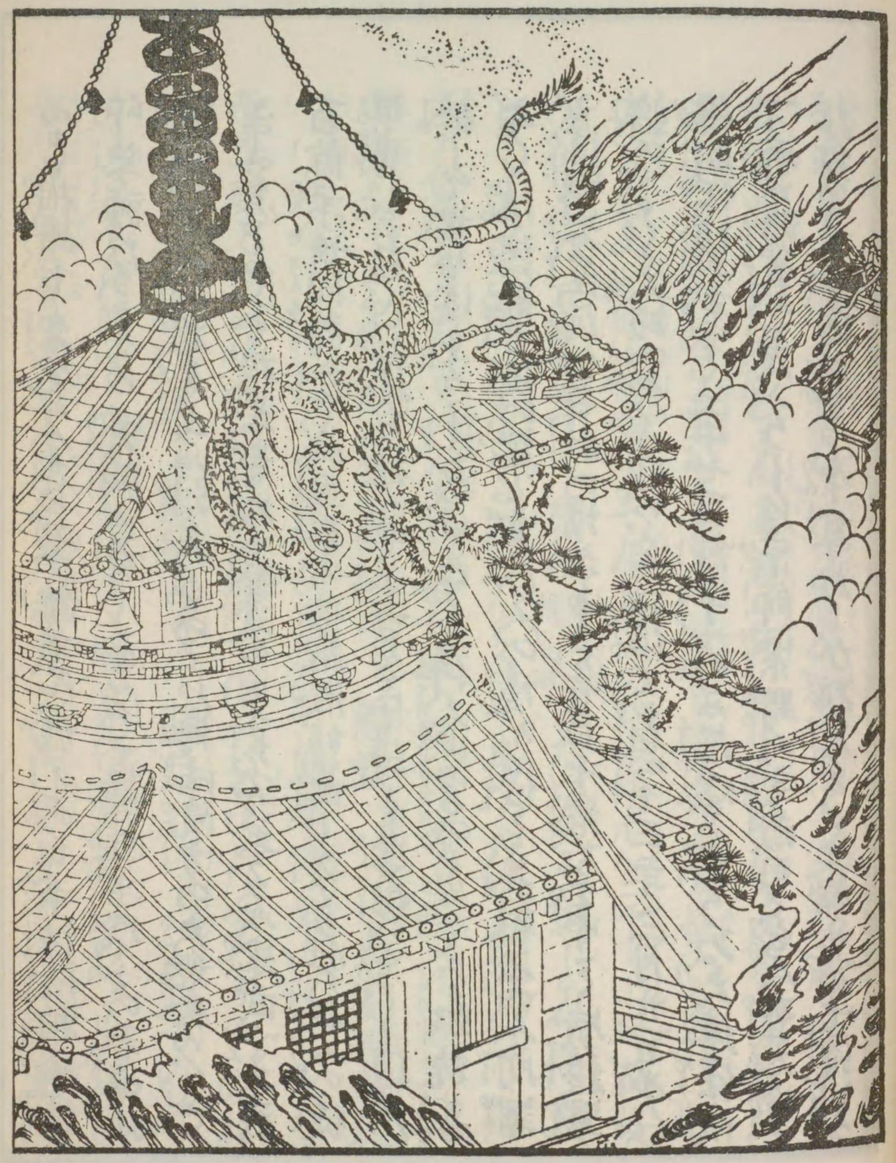
両学頭

妙音院 和州長谷寺に移す 小池坊 小谷 智積院 京師東山にあり 又其光両学頭寺六院

月輪院 小谷 教應院 小谷 修学院 前山

釋迦院 前山の東 惣持院 大塔の 理趣院 前山

抑開山興教大師高野山にはあらく天承元年大傳法院御建立ありて金剛峯寺大傳法院両勅願寺の座主に任じたまひ其後保延元年春両寺の座主職を持明院真誉阿闍梨へ譲りふ隆海あざり等相續て座主職に任じ学頭へ宝生房教尋あざり曜覚房信恵あざり等満山の座主学頭共に開山大師の門葉



みて相續し來りたるが百五十餘年を經てのち中性院賴瑜法
印学頭なりしに　天朝に奏しまゐて正應元年戊子の春傳法
密嚴二基に根來山に引うつるものとに傳法院方の大衆ならびく
きたるによりて根來寺大に繁榮するなり志るに建武以來武
百餘年世間靜なりしに軍卒の狼藉濫妨甚しかるに行人の徒
甲冑をちやくし兵杖を操りて山寺を守護し学侶はもつぱら道に
從して世に遠ざることなりけれども行人非学のともがらは家執甚
しく後には却ら他の地を奪ひ人の境を侵し其魁二四人所謂
專識岩室阿伽井杉の坊にあり各百千衆を牽て威稜軍
將のごとく大坂の命に從ひざるに依て去正十三年三月廿一日ゆ社
佛閣作坊にまとべて二千七百餘宇一時に灰燼とありぬ大傳法院
一下廓は此災を免ぬしに京師紫野の文藏司と云人豊大閤へ
なるゆりて寺に毀ち本尊ならび材木等を船に積て淀川を

引のぼせり其後慶長に京兆尹板倉伊賀を聞て文藏司を呵責し
根來へ送りかへさしむる時本尊三体は根來へおろり返しまゐり材
木ならびに大坂に棄むさて朽敗するなり慶長のころ淺野
左京大夫（幸長干時紀州大守）命して根來山の四至傍示を正し山林濫伐
を禁止に元和九年　國祖（南龍院殿賴宣卿）彦坂氏に命しく法度
とさだめ東西の坂本口に制れをかけ下馬ならび下乘の木牌に
立させたまふさしに行人に割據血腥の固執いまだ除かに數年山
中穩ならざるをかれば寶暦元年　國君（大惠院殿）右夫岡野氏
（日向守）に命しく行人に逐ひたまひて蓮華律乘両院をもて
両本頭と定めらるを六十石に寄て僧厨を資はるゆゑまことに根
嶺再興は此君のちからに依まり　嗣君（菩提心院殿）先考の御
こころさしに續て衆僧をしく國家の安全をいのらしむ又
常光明會は大婦人清信院禪尼公の御願なり往年智積院

僧正運敞師 此山に尖前山の禁する善提院の跡に小堂を構へて開山大師の宝塔を安置しなりしより何とかく奥院の御廟所といひけるへぬさしども元よりの御廟所は墓山の麓にその跡のありけまに寛政十の年前の小池坊僧正法住師ふるはをしめて石窟を築れ御廟塚と称はしたるに於て大傳法院再建の事と國君に啓 前黄門公太眞公 隨喜褒称しく資貨若干をなすに法嗣運華院法恕僧正先師の遺命を續て常光明眞言堂に造建あり 黄門閣下常光明眞言殿の扁額と手書して賜へまた 清信禪尼公の栟房蘭室に移し庫裏厨屋をなしべ建門於傳法密嚴の栟床にあつめ神社佛閣僧房等いはしへの輪奐に復せんとにねがひ禅餘に造像堂塔のことに門しくしてつひに文化の五年になりたるに也 ゆゑ聞けて侍るをかろく書ましたるに

櫻樹 開山大師手ずから栽たまふと云ふ也

さくらさ那むつしけるる老木うゑ
又櫻ゆゑりしを母もしさくら

近江 木節
紀藩 塊亭翁

碑陰 塊亭翁若冠の頃 常明僧に偈して眞言の密旨授けたる折から當山懷旧の一句をしるさしめしに即興の句なるよし今題を得してもつて不朽にそなふ

文化甲子春三月

府下 門人 津守某 江家通之

紀伊國名處圖繪巻之六下終

岩手大宮
六ケ井

岩手大宮 岩手庄宮村紀州乃小峯ふかう岩手庄十ヶ村の氏神なり境内廣嶽にして社邊桜樹多し

本社左 三部大権現右 熱田大明神 両社とも製作なり ○例祭 六月七日九月十六日十一月には火焼祭

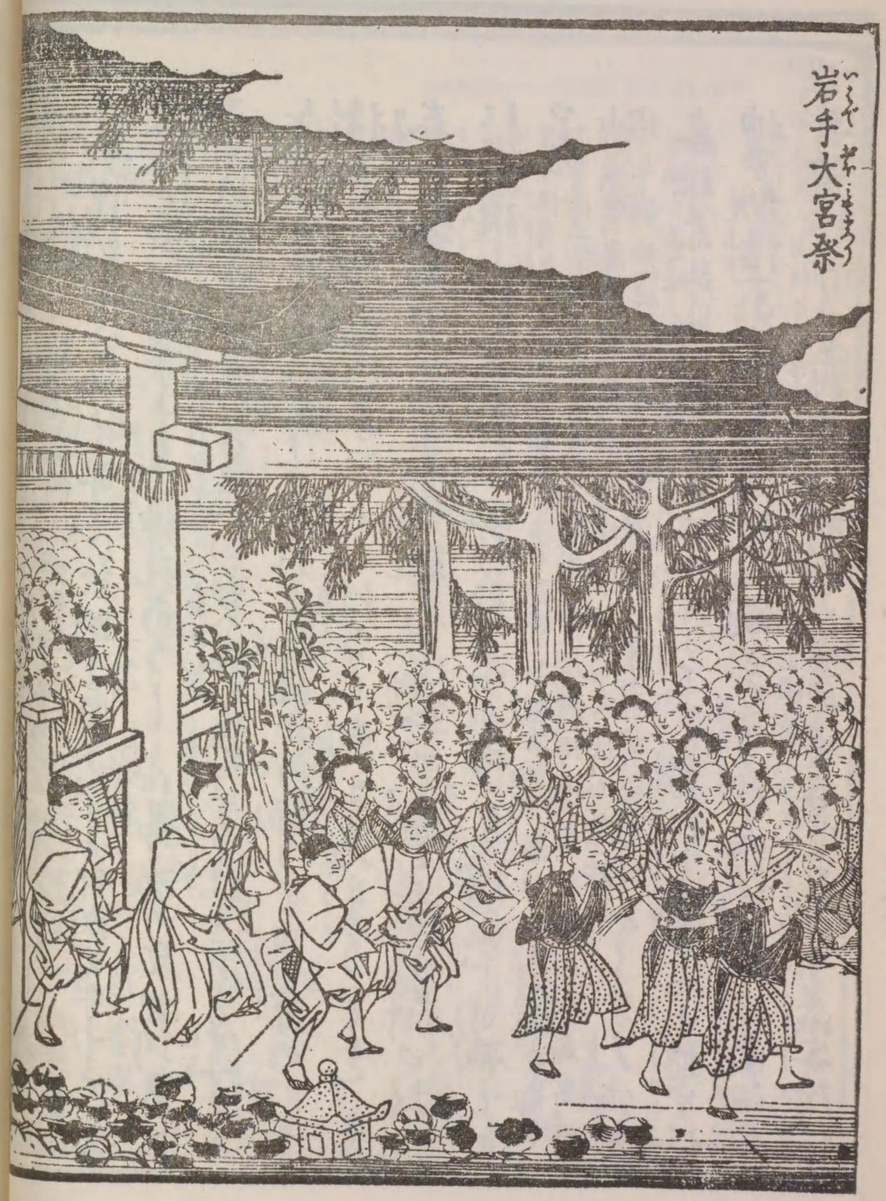
毎度あり又八月晦日乃東丑刻に齋刺といふ神事あり其式は神主一人御宣一人本御つけたる大榊を持て右社の神体にして二行に並びて鳥居を出でそれより左右小ゆるしたる上は下井坂村境貝乃接間下は吉田村の一本松といふ所に各々榊をさし尚社殿地の膀系にして渡邊の民戸に点ずる所に帰を悉消さしむ此表祈祈をもしば必霊験ありとて府下及近々の編素群集して諸ことなり

羽にて多く殿地の間に数百人充満し遊踊して眼を閉ず行祈を ○末社一祠 本社の左にあり六神合祀を ○鳥居一基 ○拝殿 ○神楽所 并 御供所 本社の右にあり ○本地堂 本社の左にあり弥當園福院これを支配を ○鐘樓 本社の右にあり ○玉塚 本社乃後にあり與教大師盛得の玉をこれ塚に納む依て名とす

社傳云熱田大明神は日本武尊を尾張國より勧請し上古は社地の東熱田森に坐しける代中古以降此地に遷坐し給へり 其舊地今に祠あり清原明神と稱し神主熱田氏は尾張國より勧請の時従来ありしと 舊社なるが故に世俗里神とも稱して崇敬はといふ三部大権現は與教大師覺鑁上人高野山に在し時密教を弘めむが為に傳法院建立の志願を

記して西國に趣かむとして城州伏見乃稲荷社に詣でなるとは遠行を止めて早く紀州に帰るべし紀州邊にて必救むる所を得べしとの神託ありしかば弟帰りて紀州邊を通るに果して岩手荘の契券を持たる然れども遣たるを拾へるこれ快からざれど中路より帰りて東寺の門に榜して券主城募りしに得なく券主帰来りなきにはこれ券を還はといへども歳歳して更に遂に岩手荘を上人に寄附しき志願を助けむとて請て下司職となり

結網集并元亨釈書にも此事あるに同集和解と按ずるに券主にて簡を添へ書る云右件村平為里先祖相傳之私領也奉為高野山正學房上人覺鑁傳法供料乃至代々可勤仕之状如件大治元年丙午七月日平為里判かくて大治元年根来山に伽藍を創せんとして先當社を建て六十餘坐の神を勧請して根来寺の鎮護とをり然るに豊太閤南征の兵燹にさしも壮麗の社殿及金剛童子堂籠所室藏寄附状



岩手大宮祭

肥伊平藏原治正

記録等悉灰燼となりて春夜の一夢となりぬるを昌平の
御代に遇ひて再建造営し寛文九年に境内殺生禁札を給
ひて日ふそへ寺黄綫信仰浅からば大社の形や備ひ

六箇堰 堰口清水村の南岸にあり紀川を堰て数万石の田島に流ぐ此堰口志
廿間ばかり下にありしを屢洪水のこゝろに破潰せるをもて天保六年十
一月官許を得て今の堰口に沒む此地下嵩石にして容易く掘抜ことあるべし
因て数万人あるを以て嵩石凡十五間ばかり穿ちて堰口とし遂に万代不易
の大堰とし

天龍山寶珠院岡伽井寺 同村にあり 真言新義 本尊阿弥陀佛 壱尺八寸の立像にて聖徳太子の御作

當寺の縁起にいはく今はむかし弘法大師勤操僧都に従
ひて我国持の法を傳へ此地に於いて修行したまふ時
霊杖を以て自開伽井を穿ち給ふ尚寺は即大師修法の
無地にして此里の名を清水と名づけ事あれども無此岡
伽井乃清水によりかゝる霊水なれば根来山繁栄の

は一山の法用此水皆此井より汲ひて日々にはたらびしと
いひ傳へ其井今に村中に於りて水清冷潔白にして寒暑
に増減なれどもなし又田園中に一此寺石あり勤操石
と号く是則僧都乃無跡にて種々の傳説ありといへり其
側に享保年中日州の沙門法印憲勝一小碑を建たり

銘云 大師一穿 歡喜池水 經九百年 惟茲井泉

密教山観音院総堂寺 同村にあり真言宗新義今天に廃を本尊十一面
観音本像にして古色あり境内に古碑一基あり天文
六年十月廿八日と刻む當寺は興教大師の草創にて
根来山所々出の護摩修行のとき宿坊とせしとぞ

岩手里 八雲御抄宗紙國分敕撰名所集藻塩草等に
本國の名所とし岩手庄中をいふなるべし

玉葉 しらこといふ志のびしたる世よりいはでぬ里の名をとどむん 従三位爲子

新續古今 はかし此岩手の里はやまづきの花咲よりやるづを和かん 後一條院御製

夫木 さらぬとは岩手此里のいはつゝどもとはまて志るく白ふ梅枝 左近中將具氏

同 こそ見ゆるは口明し夜に咲けりいはでぬ里の山吹乃ゆれ よこ人さらば

同
隣女集　山吹そのそれ里の表ようやねもーくみの花ふさてん　隆信
南都五百首哥合　思ふともひるれ世ゝやもうくむ岩手里のいそやまぶ　雅有
同　いろ〳〵ともそのそれ里の名を花にみせる山吹の比　権大納言為世
白河殿百首
里ゝ名ふいそでも表くれ一の名ふ出る山吹のも　為教
岩手驛　若山より四里南沢より名よへ二里元和年中伝馬所くれ村中より恒多の
小祠あり書時代屋より勧請と毎年十二月廿六日小祝う事うり
疱瘡神祠　備前村ようち伝曰某年五月廿二日一の老婆あり此村の大西氏ふ来て宿
て宿せんと我乞ふて泊ひべき舎無けれ共ふ我乞む所ようち只一宿を乞のくもあ
老婆納承ず色に変ー暁よ去りを出んとてつく主人の芳志感ふ深ふ我ハ疱瘡神なり
をくやん且汝が誠意に縁あり今又汝が篤志を感いるうう今より後大西の眷属
と称せん者ハ未世まで疱瘡もくーんとして去る大西氏ふ崇む
そくそのつち井木村領うて四ツ辻の東ふ又此地に祠金屋ようち祀り根
古市辻　来新栄の比毎月市ありー呼あり古市と東西南北ろろへ名と建くう
船津土　岡田村　疫神八幡大神　末社
古老傳云當社八幡大神ハ神像禅舎より流ふ来て此地ふ
そぎまうなの上ふ表ハ回廊舞基籠堂宝蔵神供所お備り
く社領も若干ようーとそ
安樂寺　同村　根来寺未　幸尊十一面観音　鎮守　白山権現　梅樹　古木
流堂ようろう　天満宮　紫藤ふり
一株とつ
二乗山小傳法院大日寺　小祠村　根来律系派に属ハ　幸尊大日如来　坐像　鎮守
寺の後ようう真言宗　門前ようう六社の神を祀る　○泉水塚　寺の西小湧ようう
今ハあ　○石塔　寺の西小湧ようう屋を造りる露と繋ふ
埋め上人ようと小祠を造ふ祀ふ　○庵　寺の東ようう
本花園ふて実ありふ人ふ来拝ふ　○春日明神社　寺の北ようう
自宅ふて村民ふ　○十物大日二尊画像　弘法大師
人ふ祀ふ所ようう
寺傳云肥前國府ふ津某総追捕使任ふ年次並ふ元の妻楊氏ハ
覺鑁上人乃母なり上人一度家を出ふ諸國を経歴し湯を
高野山より帰ふ後根来城創造ふうて母堂ふ墓ふ
逢ふ當國ふ来れども根来ハ女人結界の地ふして上人乃ふ

舟津社
大日寺
安楽寺
薬師寺

宮に入ぐるければ上人を始めら此に房を結びて母堂を住
せ村中此恵家六人に命じてこれに住へしめ給ひ園寂の後
其地を淨刹とし廟を建て増城蓋し六人を度しこゝ僧と
なし永く香花を取しめ給ひしより堂宇荒城蓋へしを
天正の兵燹に悉烟の末に消えて今は露のかゝみを殘
をり

蟹谷山寶幢院西方寺 同村山麓にあり真言宗古義勧修寺に属し僧くい一役優婆
塞弘法大師に留錫の霊利にして天正乱後廢をしを元文五年
名草郡出水村の廢寺号を乞受て再建し近年
又修覆して堂舎壮麗なること左中に類もし ○什物 本像画像にの古仏多し
又縉紳家の古書画を掛
もち屏風一
双を蔵せ

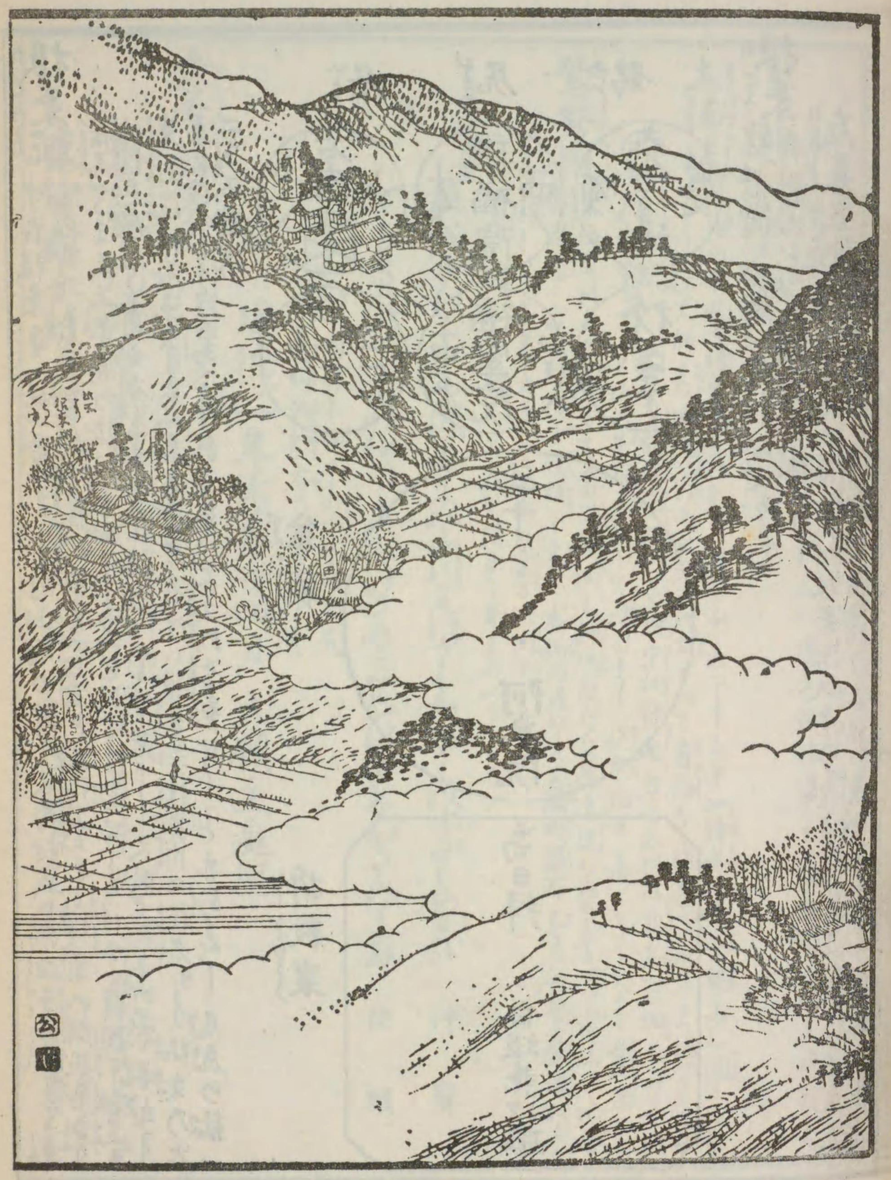
孝子勘四郎 國中孝子多し佯に南紀
忠孝傳に見えたり今畧し
南海遺稿云
勘四郎者那賀郡宮村民也齠齡喪父事母至孝貧無田宅寓
居里中一廬嘗距廬六里餘僕役村家晝以服役夜輒抵家自
母如此十餘年無敢懈日年過四十還家娶婦生一男居二年
窮益甚廼與其婦謀相別鰥居奉母母既老且盲躬亦患聾時
傭作以爲活廬主毎爲設食輒受而不食必盛之一器持歸以

饋母母餐而後始餐凡其在膝下多方承順莫不罄歡鄉隣繼
其窮相告以賑濟郡縣具狀以聞 公府 命有司母子終身
歳賜米四石并 命 旨瑜錄其事以表章嗚呼夫勘四郎目
不識丁之一邨甿尒而今其孝若斯其篤且方其窮困艱楚之
秋其艱如此其勤可謂慈愛忘勞者矣孔子所謂難能者其亦
庶矣哉世之士君子學術有餘安居飽暖不顧其親者於其心
亦何如哉勘四郎年已五十有八子曰才次郎年十四其母時
年八十歳今年實享保十年也云 祇園源瑜撰

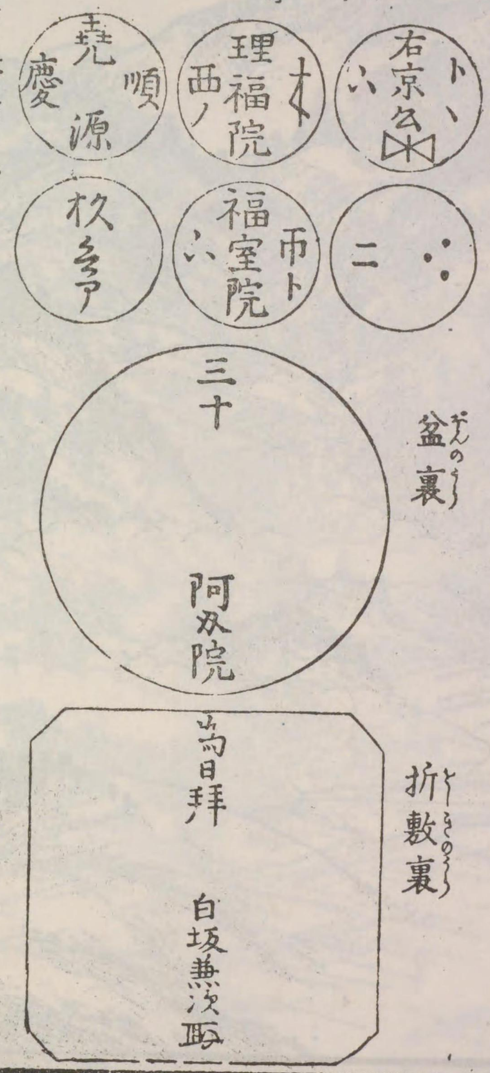
白山妙理大権現 小大池村にあり 四ケ村の氏神なり
○末社九祠 ○古碑一基 銘 正平十四年十一月八日 書辭甚古雅なり
傳云長承二年覺鑁上人越前國白山権現を勧請し社領
を寄附し社殿壮麗なりしを根来寺とともに衰へ為り
祭礼の恵蹤今も根来山中所にありて古のさま想像
すべし

東坂本村 根来山の東北坂なりて西國順礼の往来多く旅舎もあり根来山の入口に河
弥陀仏の碑あり天正十一年とあり西坂本入口にもほし河弥陀佛の
碑あり天文二年とあり其他根来山中に古碑多し
道遙院内府記
うらひとのなく孫ぢろなる山路うれ

白山權現
遍照寺
三部明神
金輪寺



根来院 中古根来寺の繁昌なりし時山内の院々又尚村或ハ西坂本等にて朱
塗の梳折敷を製し今播州の書写塗と並び賞せる根来の脇梳を云
居尻名ニ天正年間の銘ハ不多しいつの頃より製せしか詳なるべし圖本鞆足云
此ハ見聞せる内ニ右京公といふ銘あり其塗甚よし天文十三年の賣券文ニ
東寿院内右京公といふ名あり東寿院ハ根来菩提谷内の院名なり銘文乃右
京公ハ人なるべし然れハ天文ハ当製せしこと亦知るべし居尻の銘一
二ヶ所に載次



根来周 現箱又根付に多し古拙にして
左甚五郎 或書云甚又帝ハ紀州根来東坂本の産なり根来近在ニ甚五郎
の所にして重箱又硯箱にあり本地ハ唐祭にてサシロの所多し一説

ニハ伏見乃産なるべし寛永十一年に没せしといふ此人根来盛なりし時の所物
師の内の名人にて天正乃乱ニ伏見に遁れ彼地にて没しかるに伏見の産
なるべし 左宗心左勝政等乃名あり

土佛峠 同村の小葛城学中にあり峠まで三十丁山中加持水あり旱魃にも涸ぎむ
りし弘法大師葛城修行の時此山に出て自像を作りたるに土佛といふ
○産物畑牛房 葛嶺溪間押川今畑中畑神原色の山村に熟名を畑といふ此
地の牛房柔にして葛嶺溪間に押川村あり其溪流を鷲鷺川といふ此地層
鷲鷺川 東坂本に小に当りて葛嶺溪間に押川村あり其溪流を鷲鷺川といふ此地層
巒溪合して蘚滑に嶮狭く実に山の地なり巌畔瀑布をなす碧潭あり
鷲鷺川といふ毎年大晦日乃来鷲鷺此所にて来り
河内まりて鵜年に因て其名を得たり寄といふべし

堀川百首
来ぬさもしき岩波あれ山川にはかなきをしすぐるなり 仲實
とし為れぐる岩根のうれ水けさやよ毛にとまかさぬる 俊頼

○古碑二基 同所不動堂の側にあり
葛城執行者乃建たるとぞ
銘 建徳二年霜月廿四日 大願主庭堅

意看翁墓 押川村西小山林中にあり
碑に月窓意看翁墓と記し
翁ハ勢州度會郡慥柄庄東宮村の人にして姓ハ千葉なり代々
東宮村に住る故に東宮氏といふ頼学城にして駿河藩に奉仕

鴛鴦川
意看墓
滝山

川
滝山
宮谷
拾果山人

し元和以後此地を采邑に賜る爲此地の勝系を賞しまゝ致
仕乃後小庵を卜築して花をみぢにん紙をもて老を書
つり且遺云して死後此処に墳墓を築かしむ其辞世の歌として
春の花秋はもみぢ乃ちらはれをもつる姿のけどれ山風

白鬚堂 押川村の東今畑村に六右衛門といふ者あり白鬚堂といふ元祖は信ゝ末三郎秀義より六代高山六郎實信乃曾孫を文右衛門義貞といふ始てあらはす任して南北間に武名あまどもそ子孫佩戸乃民となる村中氏神の東社白鬚明神は其家族の祀る所にして昔近江國より勧請し某天皇より賜る旗及陣具をもて祈禱とし其家延元元年の勅書元弘建武乃御教書等三十六通を藏せしに元祿年中焼失して今は右宮教廻けり元弘建武の文書には村名を芋畑とせるし永徳の文書には今畑と記せり其一二を左にかゝぐ

新田義貞以下凶徒誅伐之事所被下將軍家之御教書也
於于御方致軍忠者可行恩賞之状如件
建武三年十月十七日　源國清 判

芋畑村白鬚一堂等致軍忠上者於更後諸方之給至公事
等悉可停止者也依將軍家仰執達如件

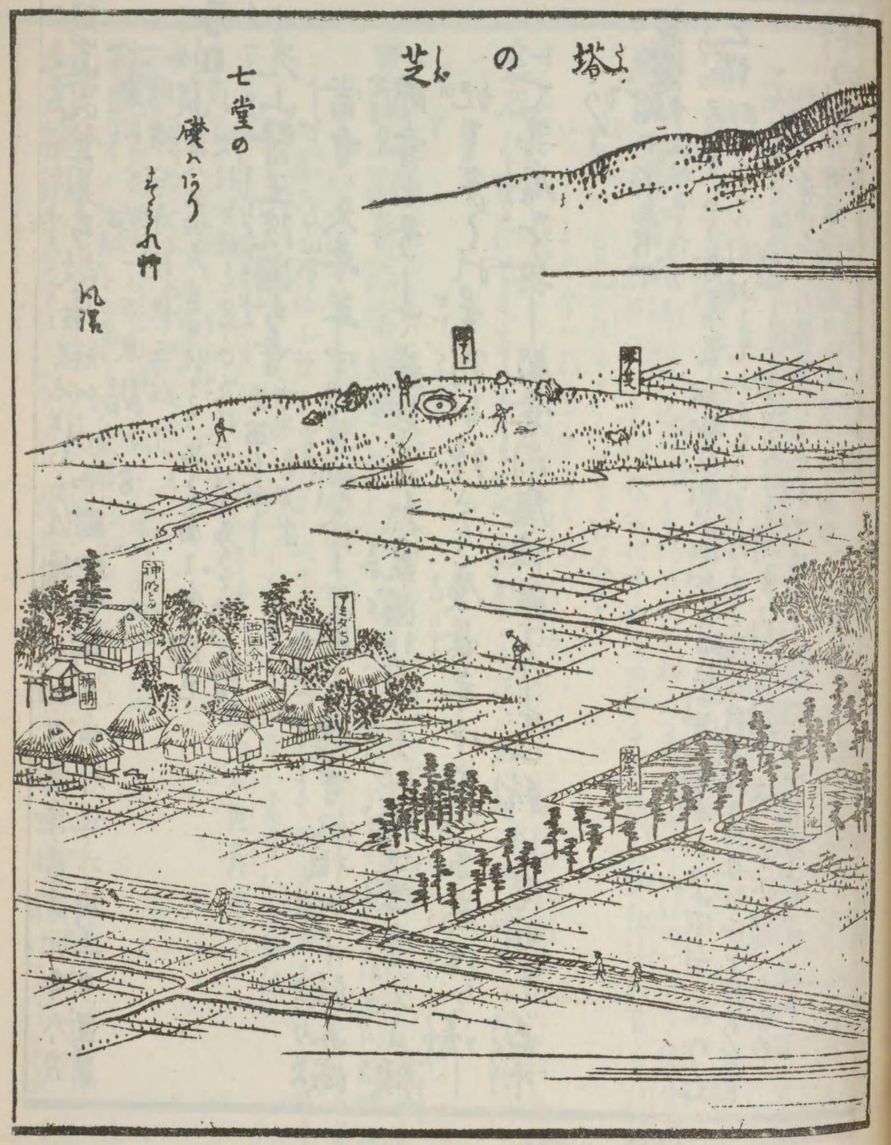
元弘三年八月十八日　左少將 判

塔乃芝 岩手郡を志ること良方十丁許西國分村にあり
田畝の間に在て方一丁許乃芝生なりいまして勝地を簡定
して建る所の國分金光明寺の廢跡なり今は弥勒堂大門
鎮守拜殿等乃趾のこ纔小祠まりの中にて大塔の礎石依然
としてあり梵唄響絶て牧笛李起る蒼古の悲系説べから
次此あたりに布目ある瓦碌乃最私を得を見て當時を想
像屋し

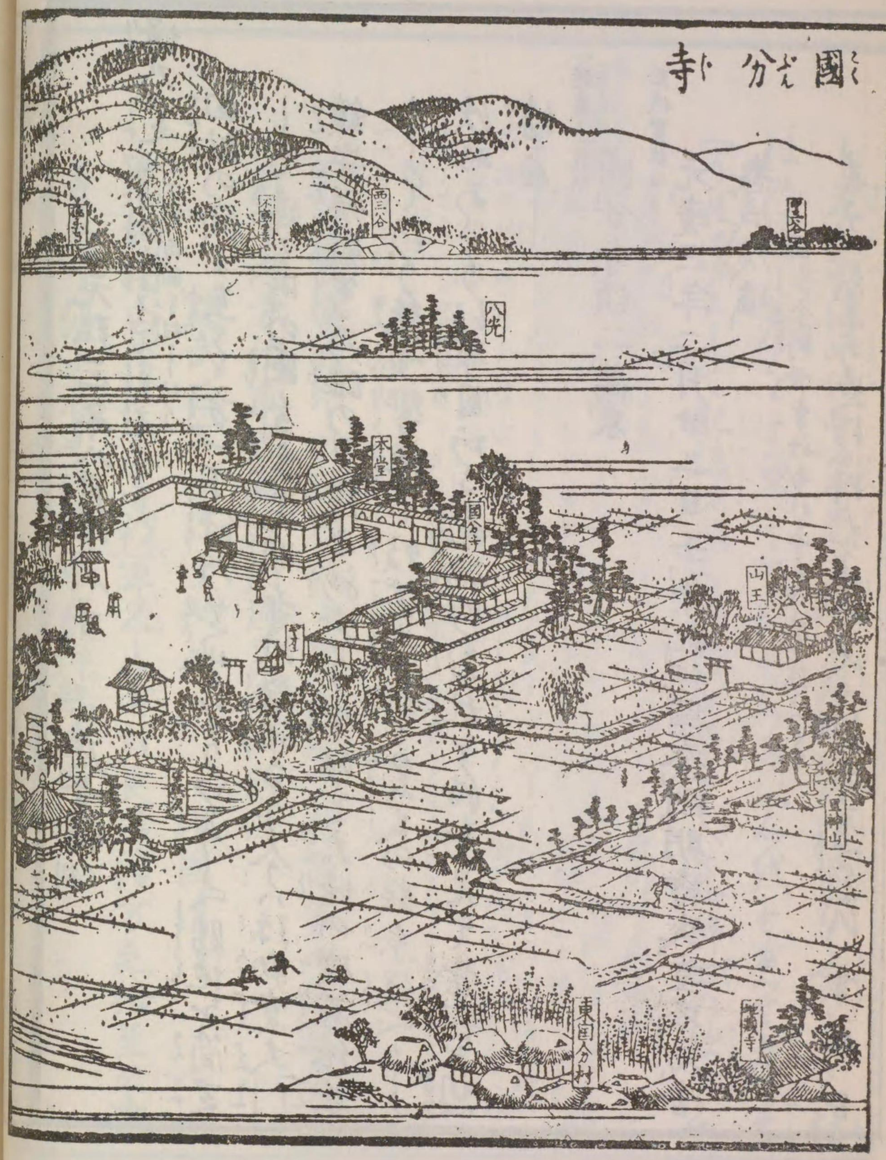
延喜主税式云
國分寺領二萬束

三代實錄云
元慶三年二月廿二日壬午紀伊國金剛明寺火堂塔坊舍
悉成灰燼
國分金剛明寺所あれあるあたり残ることて
表されバひぞりはへ渡る所となりてとるへしけのあるもなるべ　首麻呂

芝の塔



國分寺



日置毘登弟弓故居 其地詳ならず續日本紀曰神護景雲元年六月庚子紀伊國那賀郡大領外正六位上日置毘登弟弓稲一万束獻於當國國分寺授從五位下

春日川 源ハ池田庄春日池より出て南に向て流れ佐村を經て岩手庄清水村に至りて紀川に入る

八光山醫王院國分寺 東國分村にあり真言宗

當寺ハ天平年中の草創にして國分僧寺に相對し法華滅罪寺と号して巍然なる靈區なるしに中世棟宇大に傾圮し多くの星霜を經たり慶長年中古人等高僧を請じて其廢を興し殿堂門廡煥然として一新に寺領を若干あり

袈裟坂 田中庄下井坂村にあり

三塚 同村にあり鼎足して畝畝乃中に小丘を為し一を八幡塚といふ塚上に松の大樹あり一ハ芝山にて小面をあらはれたり其内伐殺ふに石を積あげ巨石をもてしき後とし廣さ丈内方許今ハ乞児の居とし次一ハ大に發きて塚の形なし並に古人乃墳墓にして其中所々にあるものなりしかたち皆同じ

岸の宮 中井坂村往還の北にあり六ヶ村の氏神なり流鏡に仕敬備なり

田中莊中に惣社八祠あり諸社の田中八社也稱次當社も其一なりて未の日の守護神に坐せば正月九月未の日を祭日とし毎月未乃日に御供を備ふ 神主を石井某といふ

若宮八幡宮 尾崎村往還の傍にあり六ヶ村乃氏神田中八社の一なり鎮坐乃来歴詳ならず或云村中地出田中久左衛門の祖勧請ハ昔も社殿壯麗にして祭祀も多く神主社人等も

倉谷川 海上川ともいふ源ハ葛城山去佛峰より出て西山田登尾等の六ヶ村を經て花野尾寺乃間にて紀川に合流ハ此川に温泉あり今ハ冷水とあり

惠福山觀音院常樂寺 花野村にあり本尊正觀音菩薩 長一寸八分傳教大師備来同浮檀金といふ相傳ふむし田中庄比叡山乃領地なりし時尚寺より二十ばかり西に七堂伽藍あり惠福山觀音寺と号ハ中ハ伽藍退轉して尚寺の南に遷ハ其地今觀音跡といふ其後又破壊に及びしかば本尊觀音ハ當寺に安置ハ委しくハ緣起に見えたり又元和年中御寄附乃石鐘籠あり

妙見社 上野村にあり田中八社乃一なり惣ハ社紀田口反余あり

鞍懸松 松田村より三丁坤にあり大磯の虎熊聖詣の紀鞍をかゝりしといふ今ハ松樹なく殺あり

山王權現 同村にあり十二ヶ村の氏神田中八社乃一なり 例祭 正月二申ノ日 別當山王寺 法輪山一乘院と号次真言古義 ○

三會寺　若宮　八幡宮　實報寺

三ツ塚
鶴洲仙

神寶太刀二振 幾川國次作 鼻高龍頭 古也

社傳云淳和天皇天長年中慈覺大師敕命を蒙り近江
國坂本より勧請せり其後此地八王子に御寄附ありしよ
り社殿も特に壯麗になりぬ

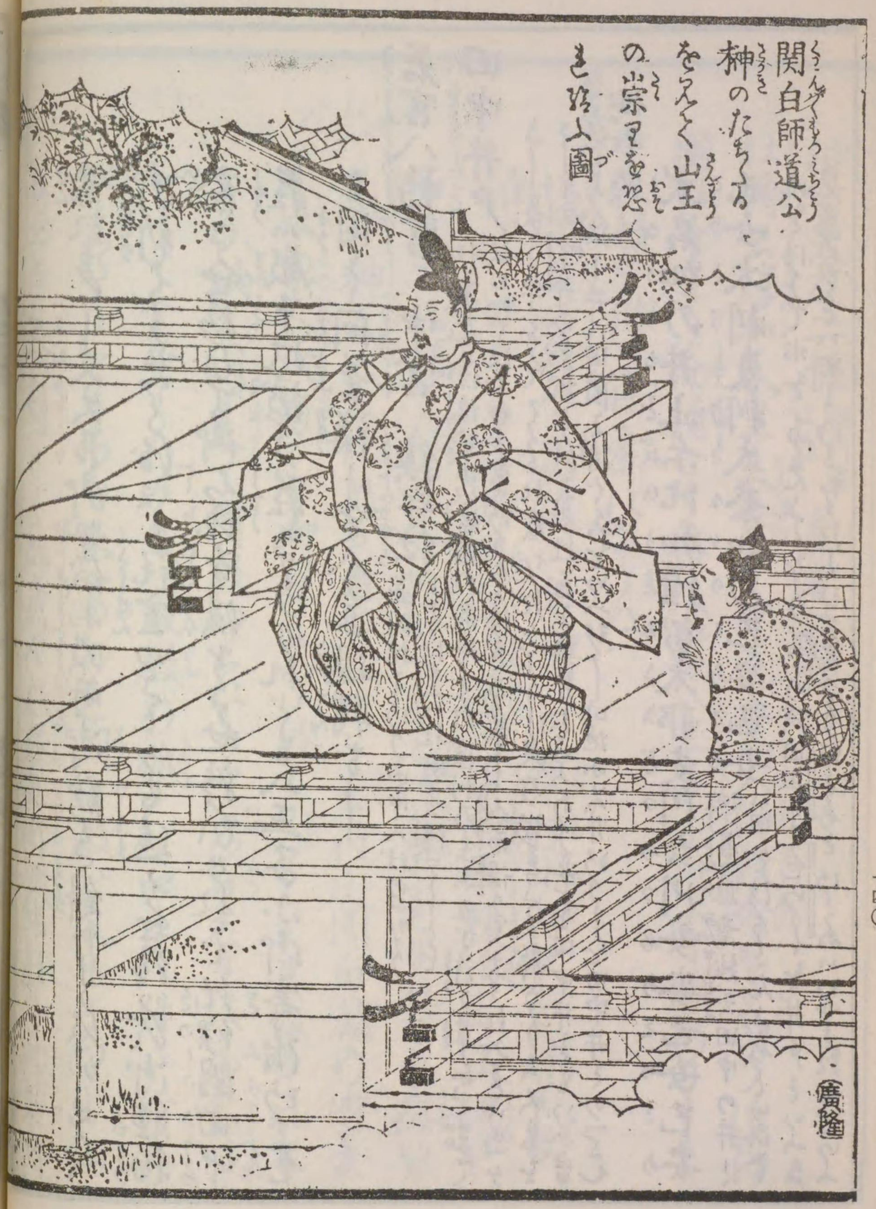
源平盛衰記云 堀河院の御宇嘉保二年山門の衆徒木紙状を持て敷
訴しけれども時の関白師通公中務丞頼治といふ侍を
召して只法に任せて防ぐべしと仰合られければ疫病を
蒙る神民六人死ける者二人云々去程に関白殿の御夢
に比叡大嶽崩る御所にかゝると覚えし又東坂本の方
より鏑矢鳴来て御殿の上に立て思召せば寝殿の狐戸に付たる青
榊立たりをる也て不審なれば関白殿は夢もうつゝも山
王の清祭怒ろしく思召事れば御頭のさいにはけき

瘡出来させ給へりと披露あり牛馬衛に馳遣ひ輿車門
前に多し父大臣御母儀に政所御歎き斜ならずかゝぐ
御祈ならずたらず云々託宣いさゝかも遠ませ給ひ御腫物
念させ給ひて御心地本復をさせ給ひければ紀伊國田中
荘は殿下の渡り荘なりけれども八王子に御寄附ある是
に因て問答講とて今に退轉なし

若宮八幡宮 中宮 鎮守社 並同村にあり田中八社の一なり
田中井戸 村葉集藻塩草に當國の名所とて窪村の東に五丁許に草など生て
沢のめくにこゆる事あり其ほとり人畜誤りて入れば出が
たし長さ竿をてさるに底なれがごとし泉の堰まてゝる躰なり去人是を
さして田中井の急地とて又これ西に福井といふあり是を田中井ともいふ皆
俱なり按に井は田薗に灌ぐ事をいふ也此地に大井あり是を田中井といふ也

催馬樂

太名加乃井止尓比加禮留太那支川女川女安己女己安
己女太利良利太奈加乃己安己女 梁塵愚案抄云田中の井と
ハ田を作らんとめといひたる
池を作りて水を多くたるなり其の所田にまかせいるを井戸といふな
ほ多くハ田にあるなれどいふ菓なり作らんとめハいやしき女といふ


関白師道公
榊のたちくる
をうえく山王
の崇里を恐
き給ふ圖
廣隆

田中の井戸

べし（徳馬系解云田中の井とは田のあるふもとにある井呼ぶ又水を引懸呼ぶ
もゝくさ（百草）はゝそ（柞）の紅葉をいふ又紫もはやくめけばいふ
ハ今のるさわおひとはそのそれ水葱のやうな萬葉にもみえ
いりのふも苗代のころもでもてうけるくゐ去るかうて野とはいふ

續古今　白雲もおりそめてそ秋ふかき田中の井戸の秋風　入道前太政大臣

續古今　秋さむき田中の井戸の秋風に稲葉そ靡く露ぞこぼるる　圓光院入道前関白

夫木抄　蛙なく田中の井戸水ひ干れてすだく風もさびしかりけり　寂蓮法師

家集　ふるかよふ田中の井戸いかにそそ埋もれ行く跡の忘らる　爲家

家集　おのなうて摘くさるびの葉もちぐさびぬ田中の井戸も人や汲まぬ　小侍從

草根集　春ふかき田中の井戸ふるさとのかきつばたのみ秋ぞ残れる　爲冬朝臣

山吹集　今ハ山吹もくなり　窪村竹房の堀ともいふ　秋荒れて田中の井戸の山吹の一もと　正徹

續古今　咲ふかき苗代水のそこ田中の井戸の山吹の一もと　待賢門院堀河

一の宮　真言古義派　別當一宮寺　嚴山法蓮院　竹房村ともいふこゝ

明星河　今ハ申ス山ノ流ヲ高野川ト云ヒ高野ノ麓ヲ流ルヽ故ニ名ヅクト云ヘリ　高野川梨誕生地　同村の氏神なり

縁起ニ云昔弘法大師此國を経歴して帰山の時此地の川
向ニ小堂一宇を建立し阿字観音縁坐安置し其ゟ弁
杖をもて手ずから法と與さん人此里に生るべしとの遺し給
一ツたて河内ニしるべ二百年の後果して明年阿闍梨誕生
せり阿闍梨年纔ニ十一にして高野山ニ登り明年祈親上
人ニ随ひ薙髪をう長暦二年弘法大師ニ向ひ師資共ニ小
拝瞻して中院を再興し後大師又空中ゟ現ぜ給ふて一
宮を擁護し給ふ乃至仏教の如くにして一
生涯の頼尋に浮ぶ慶沢の法水を汲ム又小野成尊僧都
ニ就て本山の法流を授く皆是中院流といふ寛治七年検挍
に任ぜ治山十六年を経て嘉承元年十一月宣下小僧都
南山九密教教主にして中興ゟ此師ゟ初まりの山

地原神崎村といひしを阿闍梨の竹杖より黒煙うるそ
しく生出る我見る神崎を竹房と改名し給ふかゝる
大徳乃誕生の地なれバとて後年庇生利益の為に里人当
當寺を建て信仰怠らぬとなん

元亨釋書云釋明算姓佐藤氏紀州神崎人年十一登高野
山翌歳薙染隨成尊法師學祕密法初金剛峯寺自從營攝
之始至此已二百餘歳院宇廢頽密學疎荒算慨念持明之
宗依正俱替苦修勵學度邁倫儔未終十年兩部職位諸尊
軌儀無不貫穿南嶺密乘再興者世推力於算嘉承元年十
一月十一日寂年八十六

良禪阿闍梨誕生地 當地にあり今俗にあらず

高野山往生傳云撿校阿闍梨良禪紀州那賀郡神崎人也
俗姓坂上氏云云永承三年戊子誕生其後隨中院阿闍梨
明算受兩界灌頂保延五年化歳九十二

植槻廟 黒去村の西南にあり毎年天の小祠ある地小元和年中槻の木を植させ給ふ又此
所の茅萱を移して此地に植させ給ふ一時の田にやびして右地就田のさゝめと呉郷にうつれと
の秋にあらず植槻にして植槻ハ灵灵記に謂ふ東石京殖槻寺田中廟ハ三代実録貞觀七年授大
和國無位田中ノ社ニ從五位下とあらえ給ふ此ふるゝ今大和國那山乃邑をいふなり

邊去村 此村の民ハ行基乃弟子の聖ども御祭ありしとぞ今程古文書にてもり事志ぞ事なれバ畧るゝ邊去の文字

をゆゑくらべきかゝまゝ俗なるに依て少郷去枕草子に義へらべ
されば森とありて八雲抄に國志をしらべしとあり或ハ此村の事にやといふ

邊土山地藏院極樂寺 邊去村にあり 本尊地藏菩薩
眞言古義

○什物 辨財天像 山法大師の御の書にて一万里の淺度を禁ぜられ
ゆるといふ像のうしに空海と化しまゐ形もあり甚奇
なり外に什物なし古の安國寺の什物なりといふ

○五十三人碑一基 銘 天正二甲申六月五
日 相傳ふ田中庄と云聖領と山徹乃時彩川庄より加勢又十口人を出し裏貢
をせんと欲おしも紀川大水にて無船を乘しづめ溺死せし中に一人死を遁て
出家しその亡灵を弔ひんが為に碑
をたてしまより毎年田向にしといふ

安國寺 同村にあり今大に廢れ 本尊阿彌陀如来 行基菩薩の作といふ
天蓮山宝勝寺といふ

○放生池 寺の向にあり

左衛門督源直義朝臣ハ法名を恵源といひ古山と号に添く
佛法を信じ給ふしけるが國を安じ民我利をもて佛乗に
志らべとて竟小暦應二年天下各州に安國寺を創めん事
我奏し即高僧碩徳を請して開山とし或ハ古寺我再營し
て國家鎮護乃霊場とをとられしとなり 諸國に精舍を建立ありし事和源合運扶桑禅林僧宝

龍門山

竹房

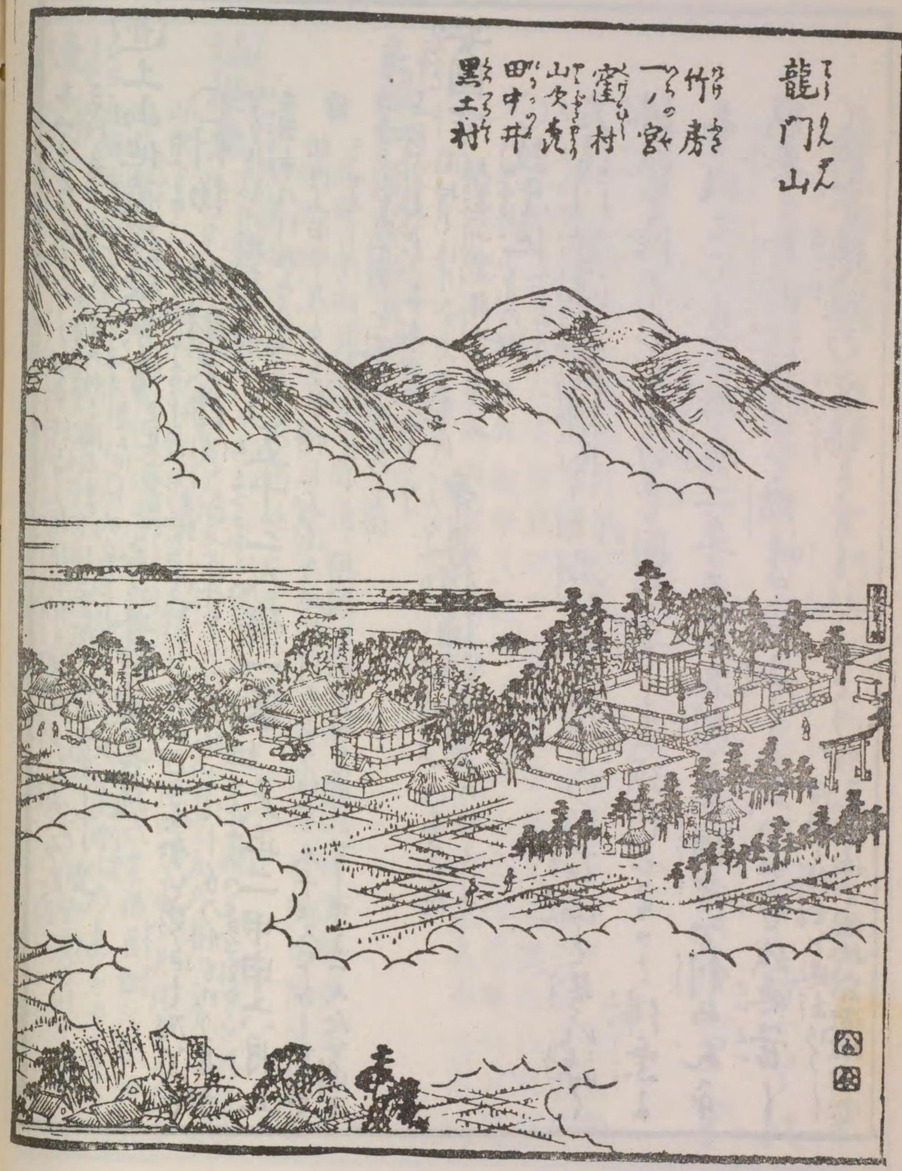
一ノ宮

窪村

山久寺

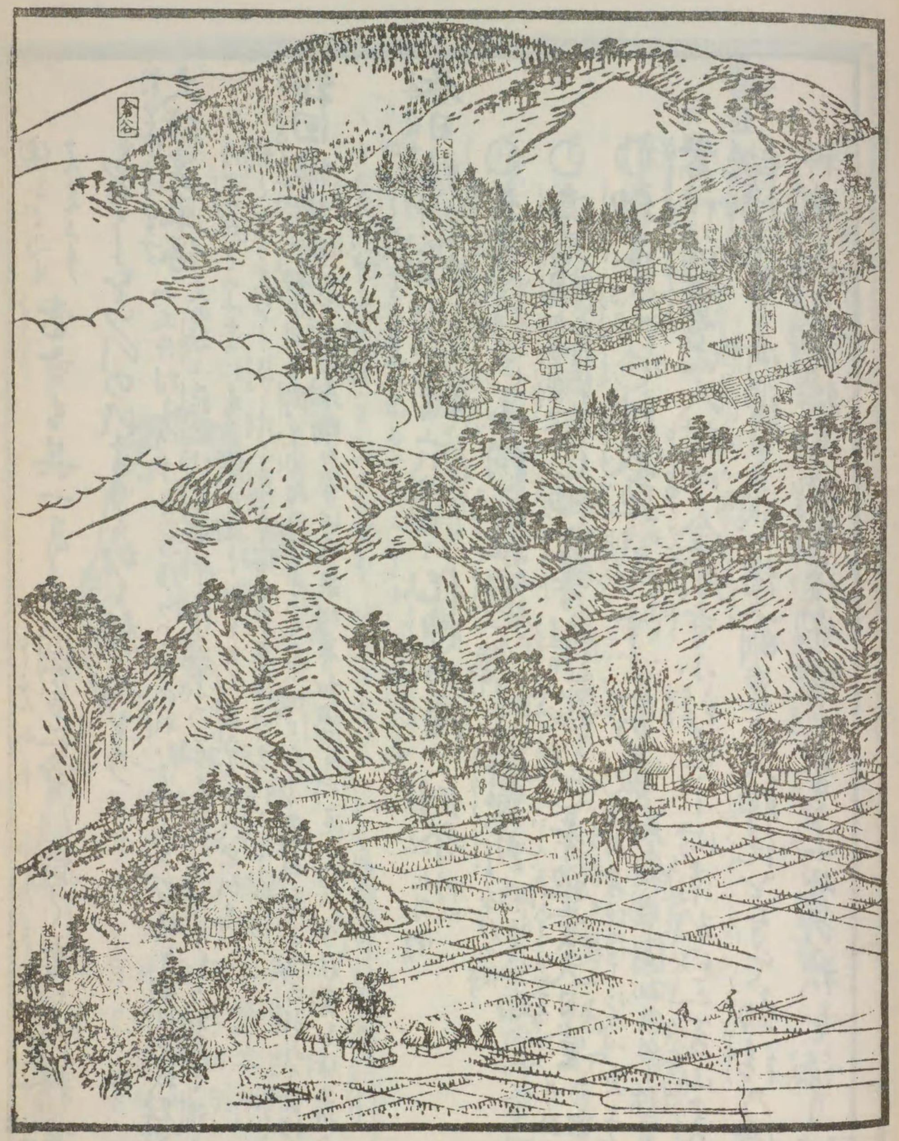
田中井

黒土村

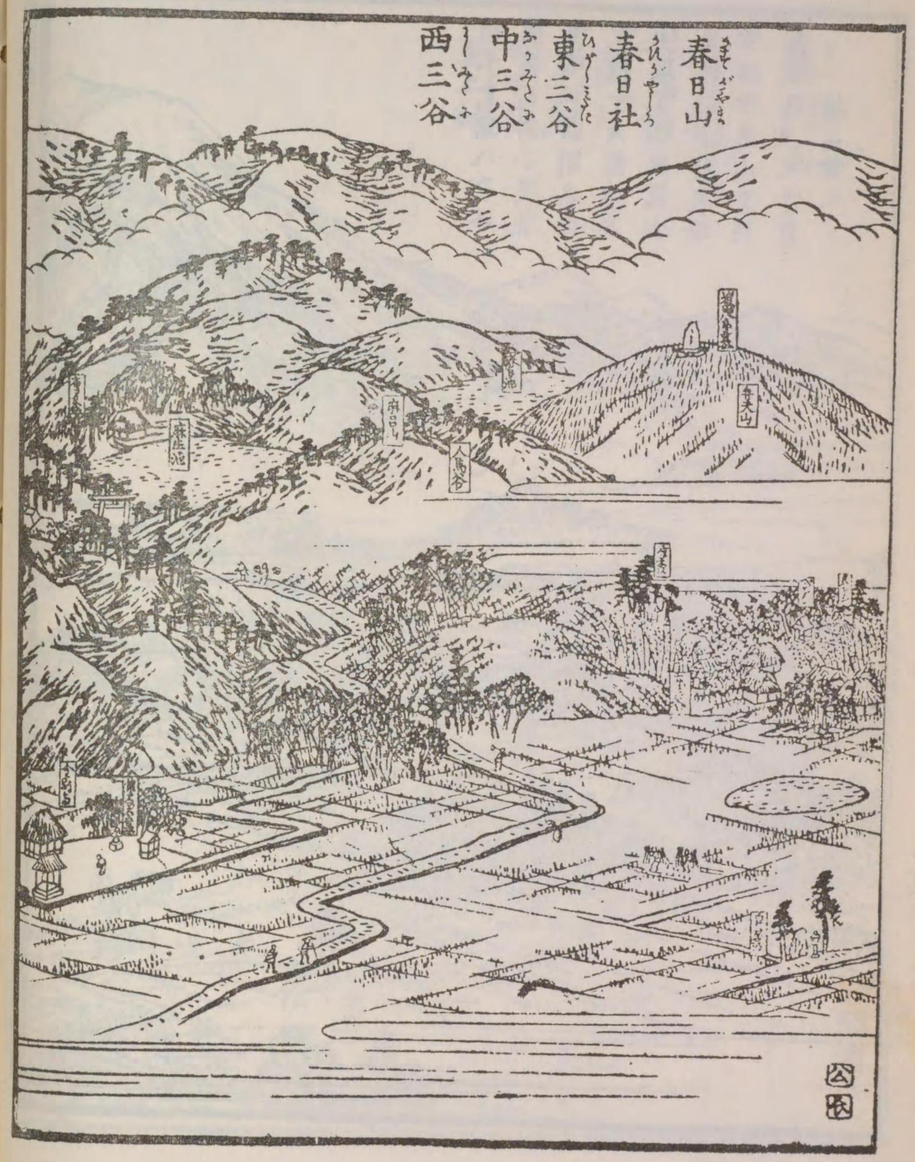


細水東頭八泉峰
関南為許小芙蓉
雲晴四國開眞面
雪掛中天露治容
仙掲苔紋經歲古
靈池劍氣射波雄
登臨除酒山家興
萬里風煙入竹窻

橘山散人



春日山
春日社
東二谷
中三谷
西三谷



傳など小も
ふるえたり　當寺も其一ゐして國分二寺に齊く盛なれ精舍
なりしをいつの比よりかかく頽廢せり

大磯虎車塚　小大井村にあり今ハ石佛を安ぜ爲我兄弟
父の敵工藤祐經を討れし後時宗乃妾大磯の虎尼となり熊野に詣る
乃峯村といふ處に來り傳に疱を去人義なるまに思ひ其
骸とゐつゝ來りし車と共に葬く塚とし車塚小名ばくとなる

和田城墟　右和田村乃例皮田村の地にあり今畑となる東西南に堀の形あり云傳に
楠家一族の居城なり此城泉州岸和田にうつしをといふ今拓骨を堀出せり
あり又村中小天守

春日社　中三谷村の小春日山の頂に祀神四座　例祭　九月中の申日
あり池田居中の產土神なり

○若宮　天押雲尊　○小祠三社　竜王稲荷八尾　○神樂所　本社の側にあり

○鳥居額　明惠筆甚古雅なり　○神宮寺　春日山延壽院といふ　○本地堂大日堂　本社乃側

○神木　鳥居乃側　○神取池　神木の西　すゞみの處　小名森垣内にあり明惠上人
暑氣を避て息ひ給ひし處なり

當社ハ明惠上人村中金剛寺に住せし時南都の三笠山より
勸請しなる御神なり或ハ傳ふ明惠上人神託をなして勸請乃時
神職義原宿祢秀鑄先哉守護しなり一首の歌を詠り今乃

神主ハ秀鑄の裔といふ
ひとしかれ春もなふとれ神垣や三笠山にかゝる月を

春日山城墟　春日山の頂松林乃中に方七間
此處地あり城が峯ともいふ
太平記南方蜂起の條云
根來ゑハケ招に味方ハ義行をも志らぬ與力同心の兵相集
て三百人紀伊國春日山の城に楯籠て二ツ引両の旗一流打立て
居たりけれを是地牲川三千餘騎の勢にて押よせ城の四方を
取巻て一人も餘さぬ討にけり

○八郎が峯　春日山の前弁才天山の上にあり岩田八郎
付死の地なり山上に碑あり紀左にあり

○人馬谷　八郎が峯の東にあり
牲川勢を埋むといふ

岩田八郎墓

八郎諱政信其先出阿
保親王姓大江至父政
廣分族岩田與北朝守
春日山城與恩地牲川
之勢力戰而死于時延
文五庚子七月文政吉

建初山愛染院金剛寺　同村ニアリ本尊毛彫ノ五輪ニ永正十年中興上人ノ草創ニシテ天正年中ノ兵火ニ罹リ堂宇悉ク烏有ニ帰セシカハ栗林八幡ノ別当ヲシテ此地ヲ領シ流伝セシムト云伝フ

伊藤太秀郷碑　俗ニ此碑ヲ秀郷ノ墓ト称スルハ誤伝ナリ

東鑑

寿永三年甲辰二月廿一日庚辰有尾藤太知宣者此間屬義仲朝臣而内々任御氣色參向關東武衛今日直令問子細給信濃國中野御牧紀伊國田中池田兩莊令知行之旨申之以何由緒令傳領哉之由被尋下自先祖秀郷朝臣之時次第承繼處平治亂逆之刻於左典厩御方牢籠之後得替就愁申之田中莊者去年八月木曾殿賜御下文之由申之召出彼御下文覽之仍知行不可有相違之旨被仰云

藤原奉成故居　池田在中城東ニ其姉住ケリト云

粉川靈驗記云

藤原奉成ハ大和國佐保住人ナリ三歳ノ解脱上人ノ勧ニヨリ千日千反ノ観音ノ宝号ヲ唱ヘ生年十一歳ヨリ尚國池田

左ノ脇ヨリ出ル事ト云伝フ信仰ノ思ヒ尤ホ依実ナリ

号三年ヲ経ルトイヘトモ猶多ノ病苦ヲ受ケ安貞二年五月上旬ヨリ腹中脹満シテ苦病難堪只観音ノ名号ヲ唱ヘ六月六日ノ暁ノ夢想ニ観音云此薬ヲ服セヨトノ御告ヲ得テ服スルニ忽チ病癒ユ其薬ハ小青竜湯ナリ

面ヲ洗ヒ朝ノ式ヲ勤ムル事ヲ得テ去ヌル寛喜三年ノ春ヨリ病ヲ受ケ秋ニ至リテ弥重ク秋ノ末ヨリ水モ小至ノ如シ

中ニ思惟スラク数河ノ観音ハ十一面ノ尊像ニ在マス事ヲ聞ケリ

紙ニ書ク物アリ十一粒ノ薬ヲ小至ノ如シ

麻ノ子ノ如ク水ニ磨和シテ服スルニ忽チ重病ヲ除滅ス

平復シヌル男女多ク感応ニ浴ス

明朝不思議ニ一粒ヲ遺ス事ヲ悔ユト雖モ永禁中ニ納テ撃ツモ力ヲ放ツ事ナシ摩尼ヲ書写山ノ縁縁真霊ト云リ

去天福二年

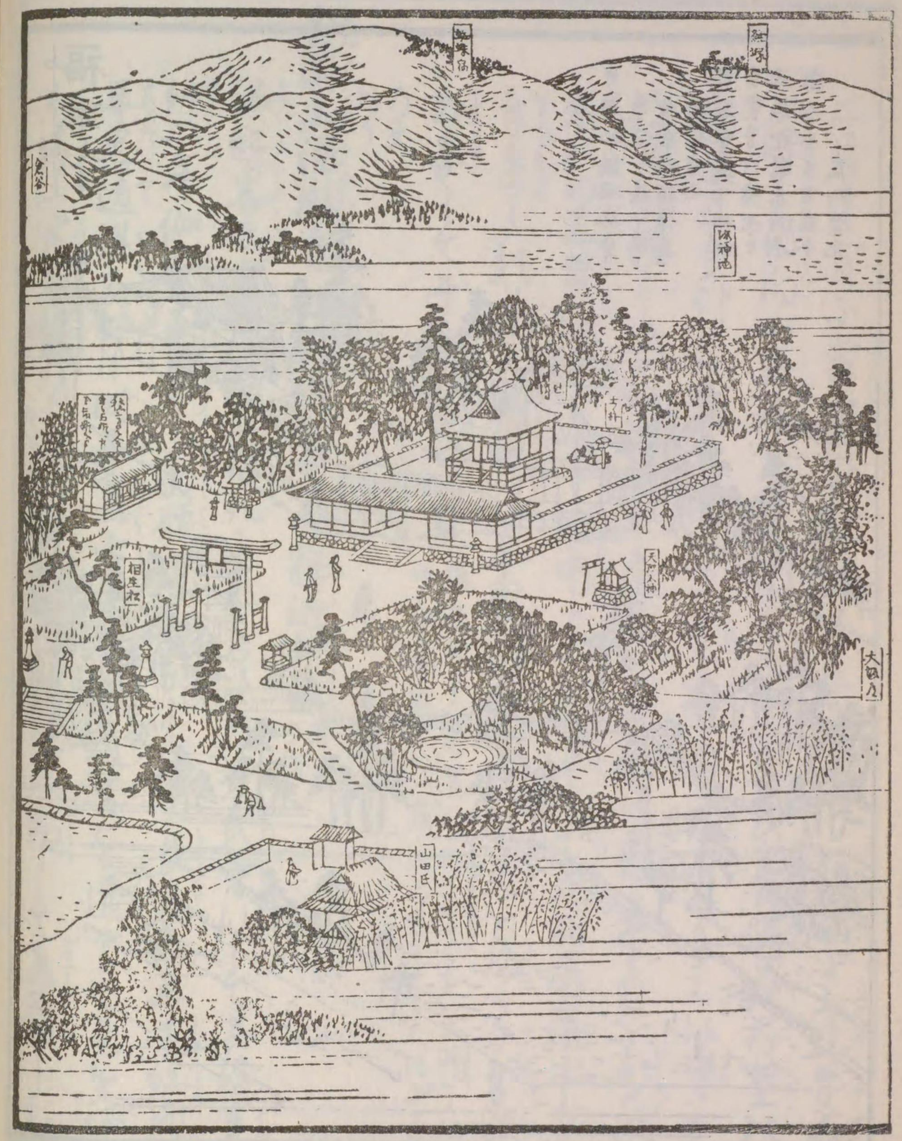
二月十二日小當寺に來ぬ此事を傳聞て隨在にふ蹤を成
が所に行向ふ物見を得ん事なれ未幾の青蓮花乃莖の
長さ二分計ある葉の中より出生して種子いさゝかに作り
枚月を經て此花漸開く遠近の輩手城又へ上下目を驚次
末代の不思議なるべし洛中より風雪して或西南院より
年重ゝ此遂に不返給奉成が田地の御下文を得りて成
出家して于今現存をり 撰集抄にハ那賀郡ゆうきといふ所に紀
四郎奉成といふ農夫ありしそ大同小異
乃文
乃文

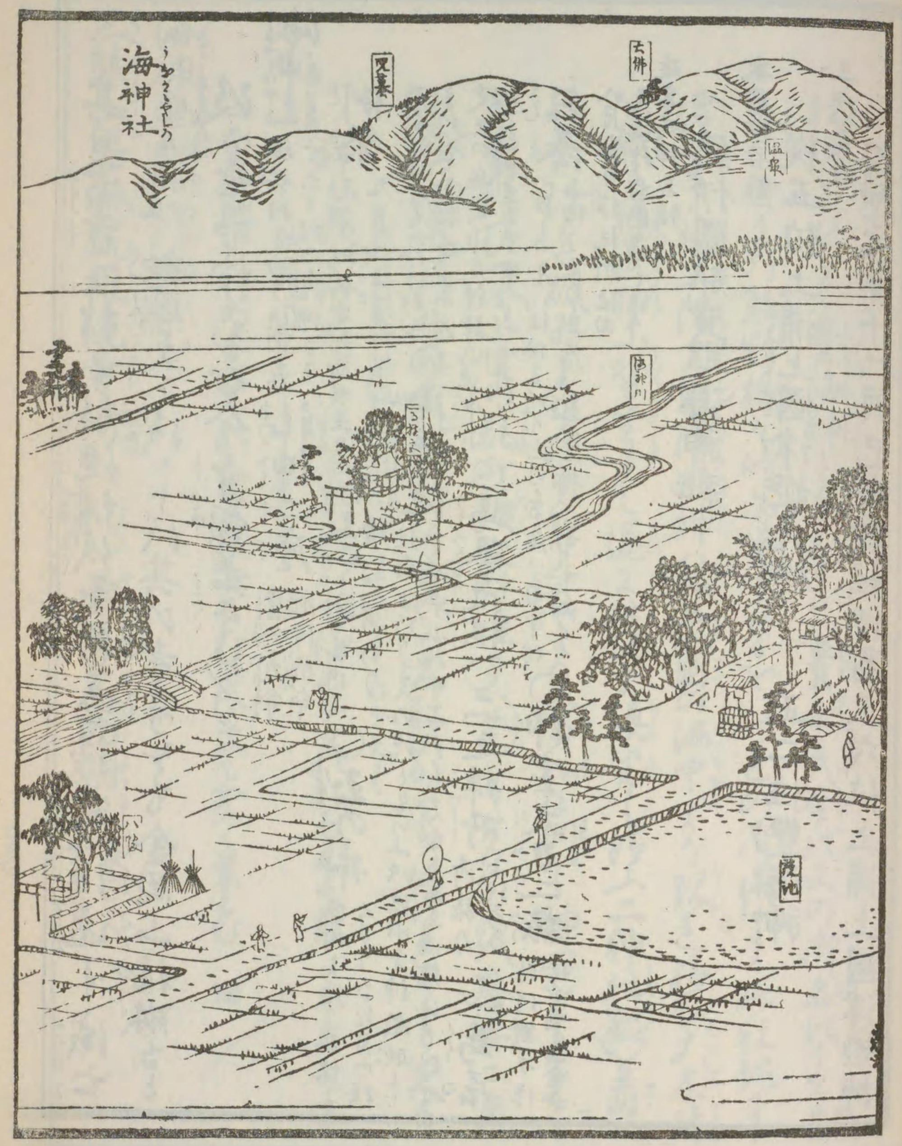
金岡山福琳寺 豐田村にあり 真云宗 本尊釋迦如來 春日の作

緣起畧云當寺ハ靈異記に見えたる慈氏寺にして其後寛
仁二年伽藍再興し勅願寺となし給ふ長元元年下總國
平忠道謀反せし時平直方中原成道等を遣して是を征
し給ふ官軍利あらざ同四年源頼信に勅して再討しむ

福琳寺

寄題紀陽福林寺
寺安後一條
帝聖影相傳其
所創建也
曾駐鸞輿宇樹林
白雲芳艸跡沈々
流風千載未消尽
猶有聖眞留到今
荒川景元




海神社

其日當寺に於て敵徒調伏を行ひ世務に逆流速に滅亡しければ叡感更に淺からざれば其後寺号をも金岡山福琳ると改させ給ふとなむ今寺領若干あり

海神社 神領村にあり池田庄十六ヶ村の産神なり 紀神二座 豊玉彦命 園津姫命

例祭 正月初午日七月十五日九月二午日十一月十五日 末社六祠 境内にあり ○玉の井 境内にあり古歌にくりかへる紀月の桂乃新さくみつけをうけを玉の井出来あり ○御鏡池 社前にあり又の池ともいふ此池水に神殿映して池中にあるかごとくなる故に西鏡池といへり天正の兵火にも神殿此池中に近き坐しまつる所なり ○馬繋の松 ○二之拜所 御旅乃小祠あり ○鳥居 三基 一の鳥居は社地にあり二の鳥居は南中村にあり三の鳥居は熊野楯が崎にあり ○神宝太刀二振 粉河國沙作 猪に明魚交丑

八月吉日作紀州池田庄海神前國次とあり

延喜式神名帳

紀伊國那賀郡海神社

本國神名帳

從五位上浦上國津姫大神 正二位豊海神

三代實錄

仁和元年十二月己卯授紀伊國正六位上浦上國津姫神

從五位下

社傳にいはく豊海神とはなるは豊玉彦命の又の御名にして名よつ世にはは熊野楯が崎に坐しけるといづきの御代より此社地に遷坐し給ふ浦上國津姫神は和泉國の海中より現き給ひ大本神を祇て神遊細に誓坐して遂に此地に鎮坐し給ふ二神社殿を並べ給ふは深き故あるなりにして上古より官社に列し神田をも多く寄せ給ひつる小世の乱れ續れ社地さへ荒れたりし我慶安二年に至て境内殺生禁札を給ひ更に大社のかたち備はまりといへり

神領村海神乃御社の二俣に覚えたる松を見えて

神と君とあらはれ御代を二代にしたるしの松を本宮の 本居大平

神領といふ名にしよせて

里の名も神のこゝろの所うちといへはさむ民草も繁く栄えむ 同

海神池 海神社の後にあり田園数百町に流く

三熊山陽瀧院權現寺 新村にあり 真言古義 本尊不動明王 長二尺 大師の作

○魅野二所權現社 祐門より例祭正月十五日 ○楊柳觀音 水月觀音と云傳へ
大磯虎石の傍にあり 九月十五日 ○大磯虎石碑 物門小あり碑面に平浦禪定尼と彫る大磯の
虎の墓といひ傳へ 我兄弟父の讐を報しもの碑なり 又逆髪武具等我魅野山にをさめしと
云傳へ 人ありて當寺をも魅野社の神主なりしと云傳へ 當寺に傳へ會稽して經を
誦して供養せしと云傳へ 又當寺小石紙を持て品々の仮脚をつくりて
いのるものあり ○什物曾我兄弟守刀 二振 虎の遺物 曾我祐成自筆歌 短冊 一枚
これは祐成が虎へ遺物として與へしものなり 杖 祐成の手ずから削りしと云傳へ あり

南陽山十輪院傳法寺 同村より西へ一丁 真言古義 本尊伽羅陀地藏 行基作
○大日堂 本堂の傍 ○鎮守社 同村にあり ○東屋門 指圖大、 ○什物 打鉦 大磯虎の持
權現社跡 古れ一本あり ○什物 古鏡一面 虎が持 ○什物曾我兄弟守刀 二振
東やのれい

摩尼山寶珠院延命寺 勝田村 本尊延命地藏尊 勝田村の祖良覺の妻ふしぎ地蔵尊の
子八度験ありしと云傳へ そもそも山の直名大磯虎御門 脇士不動明王 毘沙門
いでゝ一ときゝそうろう 天徳四年山の直名大磯虎御門 脇士不動明王 毘沙門
造功 挺地直磨天滿現仰觀多寶先豈音南山呼萬歳

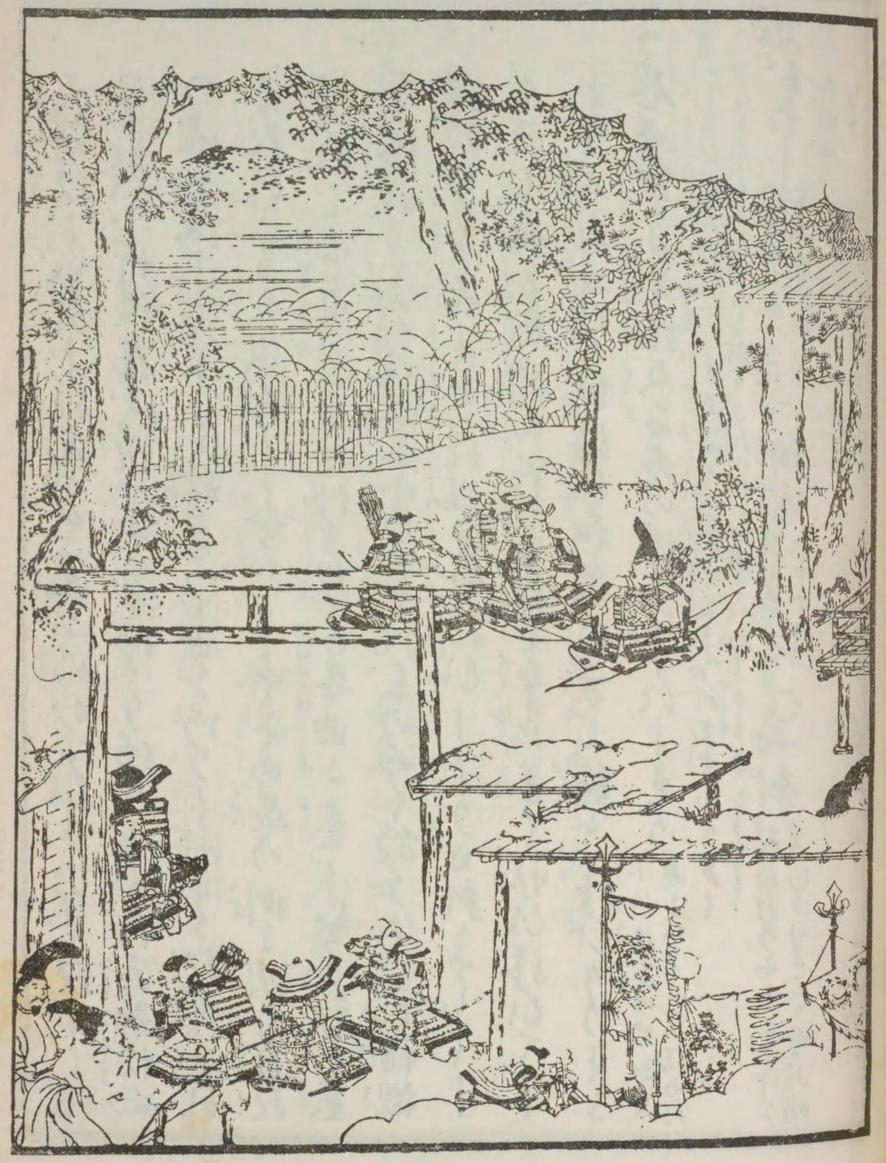
莊嚴國土利無邊

鷹坂峠 金剛寺より和泉大木村を経て鷹塚より出る 注連 これより大松
村まで峠中木立の坂道 道幅あり 此峠より下ハ阿波の堂嶋まで眼下
に見ゆ 杉木色いろ〳〵 ○ 杉木 志摩国より出 谷の水を引く 堤長百五十間 近郷の大池なり
櫻池 村名 勝田村 神社の右より志摩国へ通ず 此池より遠近へ引水 二ヶ年を経て功
慶安二年の春官命あり 畢る 今も櫻植替あり
又多の樹を植添 同村より右村 東屋御門前
壇土神社 本社 東屋御門前
天智二年の勧請 合殿 ○古碑二基 五拾の間左右にあり 年古く小
ゆえ詳ならず

當社東屋御前より此所へ鎮座ましまし 和泉大木村より勧請ましまし
る社殿なり 永禄年中桜池を修造する比 靈驗いちじるしく 更に幸社来社
殊に多し 仍て 社業小
前 禁札を掲 殺生を禁ず
神功皇后の御巻 小竹天野二社の祝合葬 此事 小
竹祝を當社へ仕まれる祝なるべし

小竹行宮舊跡 志野府小志野南志野南村の中にあるしなるん其跡詳ならず
いひ一説に云ふ產土の神ハ此ゝより小竹祝の家仕
ある神なれバ行宮の地ハ別に此邊にありしなるべし
神功皇后三韓を征伐して歸ひ給ふ時靡坂忍熊ならいふ二王
惡謀ありと聞しかて南方紀伊國に詣まし日高ふる太子
應神天皇に會給ひて儀を辭給ふ及ばし忍熊王を攻んとて
小竹宮に遷ひ給ひ此時に適りて至時れて我の如くに
して多く此日を經たり皆人うまひて常夜ゆくといひ行へ
まば皇后も御心中をうしば紀直祖豊耳命といふ人を先
して此怪行ある由ぞと問ふ時一人の翁あり是ハ
阿豆那比の罪とて二社の祝を合葬し罪なるよし我奏し
あり是小周ゝく里人等をはじへ事さるなりやと問ふ
せ給ひけるにある人をうみ出てゝ中なり此地の神ハ住ふる
小竹祝と是より東南の方三里伊都郡の天野社に住つる

小竹行宮
神功皇后
あづかひの
罪といふ
問せたまふ
呼



天野祝とは美しき友にて東小竹かよひ〻いと親しく待
ひし我小竹祝病に罹ひて身ゆかり待りしかば天野祝血
の滅を流してをしこ歎きつゝ世に行りし時より親友なれ
ど死れども穴我同しくせんとやてその屍乃側に伏て自死
にけれど合葬ひしを待りけれと委曲に奏しをり即ち墓
を開かせしく見給ふ事実ふそれ云のかく物りしかば棺槻
我改めて各吳愛に埋ませ給ひしより日新さらくし
く照て和量の別ちありけれど皇后甚く悦び給ひてこ
より大木峠を鍼給ひ和泉乃方に報き給ひけりとな
ん此事日本紀及古老の傳へなどによまり
も此地天野にちく且志賀の名中古よりの文書にも多く
見え今も二村の名に称りこれは和泉國にはあらざる事もあるべし
小竹祝天の地和泉國にありと云ふ説あれ

笈おろし 同村の小廿丁許 葛城峯中にあり
○柳宿 笈おろしの小十丁許
○一本松 同村乃小十三丁許にあり 此三ヶ所山附の行所なり

東屋峯 山家集 行地の鉄にあり今東屋嶽といふ葛城峯中なり
神和月志ゝとなれは東屋ゝ○小さ月はむ様とすゝる
笠松 東屋峯の名にあり東屋明神新向の松といふ形によりて元和年中笠松と称へ多くなりし
千草ヶ嶽 山家集 東屋嶽の小にあり葛城峯中なり
こけてゆく夕のこゝろに捕ひて千草の嶽にしたしみ
上人の家集を按ずるに此歌并に東屋峯の歌當國の名所とするなり其説なし
大木鍼 葛城の峯中にて紀泉の堺なり郡中より此上方御乃
如意山蓮華院観音寺 長田庄別所村にあり 世に長田の観音といふ 本尊如意輪観音 霊佛なり
○楼門 御乃より正面に見ゆ
○居栄松 楼門の内にありて 糸縮乃乃を蓋ふ
○三重塔 近来の建立にして
壮麗なり塔上に宝る小眺望よし
○鐘楼 鐘に当寺の縁起を彫る
○茶所 左の方にあり
古老傳云むかし一沙門あり當寺の小中村領に艸庵を結び
専弥陀を急じて毎朝松河観音に詣で有縁の霊像を得
んことを祈る一日帰路老翁蒼包を負ふに遇へり沙門怪

こて同上篇包城とけハ則聖如意輪観音の尊像なり沙門
そゞ所に轟びて金を與へて尊像を包ふ篇を金を辞し
像城とゞ名へ南都をたして去れ沙門草庵にして世帰
ひ其像を安置し朝懺誓悔怠り相しを後奇瑞日に
新に香花の客群をなせり星霜うつりて天正年中に至
ひ堂舎焦土となりて尊像のこ幾小史黄城免ましを
元和年中薩州の沙門道譽を廢絶を嘆きて小堂城黄
こ側に僧房を築れて供書れ雲を起れ寛文年間　國
君其地に巡遊し輿を寺門に寄れひ民屋の間に接する
事不可なりと命じ給ひて今れ霊地に移させ水田若干
を寄をて厄難消除乃所祈願所として相再興の志を勵
し給ひしより一伽藍の場となりまゝ後厄除観音と稱
して毎年二月上年日よハ四方の道俗随喜臨礼しる群

糸をなす事憚くとしく恰稲麻の如し　男女厄年の事中古乃書に書くべし和年に説
事に詣づる事ハ水続の序に注しむべきなり是て二月の和年れ日龍蓋寺へ給
で給ひて云く今年七十三にあたれり給ひ三十三をあらずして相人なりしも中
ひしみ乃年毎にさけらるゝの和年新日まかりてつる志ましれこそいまゝで世に
給ひしとなり

○古墳　大門の側にあり何人乃墳なりやしらず

藤の井戸　同村の南岸にあり弘法大師陽をとゞめて加持し給ひしかば冷泉涌出せりとぞ

猿引　上田村の小猿屋垣内といふ所に住れ家数二十軒侍あり猿引由来の紀数書にあり事長けれど載せず

たる引の猿れ衣裳もしのこゝろハ総にたりする中ごの虫干　拾栗山人

風森大明神社　島村にあり長田庄六ヶ村の氏神なり例祭九月中午日　祀神三座　中央科長戸邸尊左若一王子右母生明神

○末社　弁才天　天満宮　○神宮寺　本社の側にあり

家集　粉河寺にまうてつきて風の森といふ所にて

いとしへもまれのあらハあざかれといふ小蔵らむ頃風の森　大納言公任

夫木抄

うらみじ風の森なる梅花さこそあらぬ夕に咲とも　鷹司院按察司